

『旗を高く掲げよ』古川健

登場人物表

ハロルド・ミュラー 夫 歴史教師からSS隊員へ

レナーテ・ミュラー 妻 主婦

リーザ・ミュラー 娘

コンラート・シュルツ 祖父 レナーテの父親

ロッテ リーザの友人

ペーター・マイヤー SS士官 ハロルドの友人

バウワー ペーターの副官

ヘルガ・シュヴァルツ レナーテの親友 ベルリン出身ミュンヘン在住

オットー・ワルター ユダヤ人 ハロルド夫妻の友人

ブルーノ・コツホ ハロルドの友人 先天的に左手に障害を持っている

プロローグ 1945年4月21日 ベルリン陥落寸前

ベルリン市内リヒテンベルクにある平均的な邸宅の一室。居間と食堂を兼ねる室内には質素ながらテーブルセットとソファセットが揃っている。ひと際目立つところに、ナチスの開発させたラジオ「国民受信機301」が置かれている。砲撃の音が断続的に続いている。この日、ベルリン郊外に突入したソ連軍の重砲が火を噴き、初めてベルリン中心部に砲弾の雨が降り注いでいる。テーブルではこの一家の主であるハロルド・ミュラーがSS（ナチス親衛隊）の制服に身を固め、頭を抱えている。ラジオからは宣伝相にしてベルリン防衛総監ゲッベルスのヒステリックな演説が聞こえている。

ラジオ音声 勇敢なる我がベルリン市民よ、いよいよ偉大なる第三帝国の市民たる諸君の力を共産主義者どもに見せつける時が来た。武器を持てる者は全員、徹底的に戦うのだ！我が帝国の首都を守り抜くのは、市民一人ひとりの力である。我が總統の元に団結した我が国民は幾多の奇跡を演出してきた。我らドイツ民族の魂、ベルリンを薄汚い赤軍の手から守り抜くのだ。「人々よ立ち上がれ、そ

して嵐を起こせ！」。

ラジオからナチス党歌『旗を高く掲げよ』が続けて流れる。砲声はひっきりなしに聞こえている。ハロルドの妻、レナーテが別の一室より登場、ラジオのスイッチを切る。

レナーテ あなた・・・

ハロルド おしまいだ。

レナーテ え？

ハロルド 我が第三帝国は滅亡だよ。ベルリンもそう長くはもたない。

レナーテ ・・・そう。

ハロルド この砲声、どうやらベルリン中心を狙っているようだな。

レナーテ 昨日は総統のお誕生日をお祝いしたばかりなのにね。

ハロルド その後、政府や高官は総統を残してベルリンから脱出したそうだ。

レナーテ信じられない・・・我が帝国が、ベルリンが赤軍の手に落ちるなんて・・・

ハロルド・・・レナーテ、しかしこれは現実だ。

レナーテ（にわかに興奮して）総統はドイツは負けないと仰ったわ！それなのにこれはなに？

ハロルド ・・・

レナーテ 私達ドイツ人は千年王国を築いたはずでしょう！

ハロルド・・・残念だが私達の信じた世界は崩壊する。後に残るのは何も無い。膨大な

瓦礫の山があるだけだ。

レナーテ どうして？どうしてこんなことに。

沈黙。レナーテの父コンラート、登場。

コンラート レナーテ、ハロルド。いよいよのようだな。

レナーテ・・・最悪よ。私達はもう死ぬしかない。

コンラート 馬鹿なことを言うな！

レナーテ ・・・

コンラート ハロルド。

ハロルド はい。

コンラート 君はどうするつもりだ？

ハロルド どうするとは？

コンラート 逃げるのか？戦って、ヒトラーに殉じるのか？・・・それとも自分の手で全て

を終わらせるのか？

レナーテ お父さん、総統はまだ生きてらっしゃるのよ！

コンラート お前は黙ってる、私はハロルドに聞いてるんだ。

レナーテ ……

コンラート ハロルド、あまり賢くない女だがこれでも娘だ。

ハロルド ……お義父さん。

コンラート 私はもう十分に生きた。だがやはりレナーテとリーザは生き延びさせてやりたい。

ハロルド それは私も同感です。…妻と娘には逃げて欲しい。

レナーテ 逃げるってどこに逃げるのよ？それに逃げようにも立ち退き許可証がないわ。許可証がなければ裏切者として処刑されるだけよ。

ハロルド ……許可証ならある。

レナーテ 本当？

ハロルド ああ、昨日のうちに防衛司令官ライマン中将のサインをもらっている。これがあればベルリンから脱出できる。処刑されることはない。

コンラート SS中佐のコネか。市民のほとんどは逃げたくとも逃げられないのにな…

ハロルド ……

コンラート すまない。感謝すべきことだ、つまらないことを言ったな。

ハロルド ……

レナーテ 赤軍から逃げることなんてできるの？ロシア人に捕まったらどんな目に遭わされるか…

コンラート ここにいれば確実に赤軍がやってくる。少しでも可能性があるならベルリンを離れて西に向かった方がいい。アメリカ軍の支配下の地域に逃げ込むんだ。

ハロルド ……

コンラート レナーテ、お前たちはリーザを連れて西に逃げなさい。

レナーテ 待って、お父さんを置いていけるわけがないでしょう？

コンラート 私のことはいい。リーザのことを考えるんだ。ただの噂であって欲しいが、ロシア人がドイツ人の女性にどう振る舞うか、お前だって耳にしているだろう？

レナーテ ……

コンラート ハロルド、娘と孫を救ってやってくれ。

ハロルド (暗い顔でうつむいている)

コンラート ハロルド？

ハロルド ……私はSS隊員です。しかも中佐という地位にあります。そんな私が逃げるのが許されるのでしょうか？

コンラート だが君はSSとはいえ文官だろう。戦う義務はないはずだ。それにもともと君は生真面目な歴史教師だった。今も本質は変わっていない。

ハロルド ……

コンラート 責任を感じすぎる必要はない。ドイツで賢く生きる延びるにはナチスに同調するしかなかったんだ。君はただ家族の為に仕事を続けてきたに過ぎない。ナチスと共に滅びることはない。

ハロルド ……
コンラート ハロルド、迷っている時間も惜しい。生き延びて、それから考えるんだ。

一家の娘リーザ、登場。サイズの合わない作業服を着ている。つかつかと歩み、止まる。

レナーテ リーザ？どうしたの？

リーザ (高らかにナチス式の敬礼) ハイルヒトラー！

三人、凍り付く。転換。

1 1938年11月 「水晶の夜(ユダヤ人に対する組織的暴力事件)」直後

(1)

プロローグの七年前。同じくミュラー家。レナーテの友人、ヘルガがソファアに座っている。国民ラジオがゲッベルスによるプロパガンダ演説を放送をしている。

ラジオの声 さる11月9日から10日にかけての暴動、水晶の夜事件はもちろん我が総統も我が党も何ら関与するところはない。ごくごく自然発生的な事件であり、その責任は暴動参加者一人一人に帰せられるべきものである。しかし我が帝国の賢明なる市民なら理解しているはずである。この事件は、煮えたぎる民族精神の正当な蜂起なのだ。ユダヤ人は我々ドイツ民族に寄生し、我々が我が民族の未来の為に蓄えた財産を、不当に吸い上げ、懐に入れてきた。我がドイツ民族は奪われた物を取り返さねばならない。その為の闘争は正しき民族精神の発露なのだ。

ヘルガ、憂い顔でラジオのスイッチを止める。大きなため息。レナーテ、登場。

レナーテ ごめんなさい、ヘルガ。待った？

ヘルガ いいえ、レナーテ。急に来てごめんなさいね。

レナーテ いいのよ、久しぶりに会えて嬉しいわ。

ヘルガ ありがとう。

レナーテ (自分の服の臭いをクンクンと嗅いで) ねえ、私臭わない？

ヘルガ 大丈夫だと思っけど…

レナーテ ちよつと残飯の仕分けをしてたから。

ヘルガ 残飯！なんで？

レナーテ なんてって里豚の餌よ。

ヘルガ ああ。あれね。

レナーテ 家庭の残飯を集めて、農家の豚の餌にする。これで貧しい家にも豚肉が届くよ。素晴らしい考えだわ。

ヘルガ あんまりうまくいってないって噂で聞いたけど・・・

レナーテ そうなの？でもこれはなかなか肉も食べられない子供たちの為になることよ。きつと軌道に乗るわ。

ヘルガ ゴミの出し方まで政府に指定されるってのもちよつと窮屈ねえ。

レナーテ そうかしら？いいことだと思うけど。(ラジオが止まってることに気が付いて) あら？ラジオ止めたの？

ヘルガ ええ。

レナーテ せっかくの「国民ラジオの時間」なのに。

ヘルガ・・・労働者も手を休めてラジオを聞いているのね。

レナーテ そうよ。全てのドイツ人が同じ時間に同じラジオを聞いているってなんか興奮しない？なんかゾクゾクしちゃうわ。

ヘルガ そう？・・・私は想像するとゾツとしてしまうけど。

レナーテ どうして？民族が一つになってるってラジオを聴くだけで感じられるなんて、すごいことだっと思わない？

ヘルガ それが怖いよ。それに放送の中身はあくまでナチスの政策に沿ったものでしょ？

レナーテ 何か問題があるかしら？総統のおかげで私達、やっと人間らしい食卓を取り戻せたのよ。パンも肉も我が総統のおかげで買えるようになった。

ヘルガ ええ、それは認めるわ。たった五年で不景気も失業者の問題も解決した。信じられないような奇跡ね。

レナーテ このラジオだっってナチスが開発してくれた。ラジオだけじゃない、とうとう手に入りやすい自動車まで作ってくれた。

ヘルガ そうね。

レナーテ 思い出してよ、ヘルガ。あのひどいインフレの頃を。私、あの頃はジャガイモ一つ買うのだって迷いながら買ってたわ。今、そんなことないでしょ？ジャガイモだっってパンだっって安心して買うことができる。本当に素晴らしいことだわ。

ヘルガ ・・・・

レナーテ どうしたの？

ヘルガ ねえ、レナーテ。

レナーテ

なに？

ヘルガ

私、結婚してミュンヘンに移ったでしょ。

レナーテ

そうね。

ヘルガ

あそこはナチス発祥の地よ。

レナーテ

もちろん知ってるわ。

ヘルガ

十年前のナチスはまだ国会議員十人ちよつとの小さな党に過ぎなかった。しかも過激なことばかり言って、街頭で共産党と喧嘩騒ぎばかりするごろつき集団だっと思われていたわ。

レナーテ

ちよつとヘルガ！

ヘルガ

私ねその頃、ナチスの突撃隊がよつてたかって一人の若者を棍棒で殴るのを見てしまったの。その若者は多分、共産党か社会民主党の支持者だったのよ。私、恐ろしくつて震えたわ。あの時の血まみれになった若者の顔が今でも忘れられない。

レナーテ

・・・・・・・・

ヘルガ

あの頃から、ナチスが政権を取るまでに五年。政権を取ってから五年。この十年でドイツは大きく変わった。今の状況、十年前には想像もできなかったでしょ？

レナーテ

ええ、ドイツは甦ったのよ。

ヘルガ

・・・私、怖いよ。

レナーテ

怖い？

ヘルガ

ナチスの本質はきつと十年前のごろつき集団から変わってない。そんな人たちに私達ドイツ人はこの国を託している。・・・いつか恐ろしいことが起こる。そんな気がしてならないの。

レナーテ

恐ろしいことってどんなこと？

ヘルガ

それは・・・分からないけど・・・

レナーテ

（笑って）考え過ぎよ、ヘルガ。そんなことよりも、私達はヒトラーが成し遂げてくれたことをちゃんと評価しなければいけない。さっきも言っただけ、総統は私達の台所を救ってくれた。そしてアンシュルスでオーストリアをドイツに復帰させた。更にチェコからズデーテン地方も取り返した。どういうことか分かる？

ヘルガ

・・・・・・・・

レナーテ

我が総統は、窮地にあつたドイツ民族の子供たちを救ってくださったのよ。チエコではドイツ民族なのにドイツ語を話すことすら許されなかったって言うじゃない。そんなかわいそうな子供たちだって、総統によつて、このドイツで健全に成長することができるようになった。これがどんなに素晴らしいことかあなたにも分かるでしょ？

ヘルガ 確かに、考えられないようなことをヒトラーはやってのけたわ。このドイツが
どんどん強く大きくなっていく。それに高揚する気持ちは私にも理解できる
の。

レナーテ そうでしょう？

ヘルガ だけど、この高揚感の行きつく先がどこなのかはまだ誰にも分からない。私は
それが不安なの。

レナーテ 総統はこれからも、ドイツ民族の子供たちを素晴らしい未来に導いてくださ
るわ。

ヘルガ ……そうだと良いのだけれど。

ハロルドの声 たいまー。

ハロルド、その友人でユダヤ人のオットー、登場。

レナーテ お帰りなさい。あら、オットーさん。

オットー 邪魔するよ、レナーテ。……ヘルガじゃないか！久しぶりだ。

ヘルガ お久しぶりね、ハロルド。オットーさん。

ハロルド いらつしやい、ヘルガ。どうしてベルリンに？

ヘルガ ちよつと両親の顔を見に里帰りよ。あなたは変わりないようね。

ハロルド ああ、元気にやってるよ。

レナーテ この人ったら、いつだって古文書やらを相手に仕事しているから、最近顔つき
まで古びた本みたくなってきたわ。

ハロルド ご挨拶だな。僕の仕事相手は本だけじゃないよ、ちゃんと子供たちに授業をし
ているんだから。

レナーテ はいはい、そうでしたね。ドイツがどんなに良くなっても、あなたのお仕事は
変わらないのねえ。

ハロルド (オットーを気にして) おい、よさないか。

レナーテ なによ？

オットー 気にしないでくれ、ハロルド。

レナーテ ……ごめんなさい、オットーさん。

オットー いいんだ、君達は友人だ。気にすることはない。

ヘルガ ねえ、オットーさん。あなたの商店はこの前の暴動は大丈夫だったの？

オットー 大丈夫なわけないさ。他のユダヤ人の店同様に荒らされたよ。ガラスは粉々、
家具はバラバラ、売り物はみんなめちゃくちゃにされたよ。

ヘルガ そう……

オットー 幸い家族はみんな無事だった。……それだけでもありがたいと思わなくちゃ
いけない。実際、友人は何人も殴られて怪我をしたよ。まだベットから起き上

がることもできない奴もいるんだ。それに被害者なのになぜか逮捕された知り合いもたくさんいるよ。……私達が何をしたと言うんだ？

間

オットー

ある友人の娘はあの夜、運悪く一人で出歩いていた。暴徒に囲まれて、何時間も「我が闘争」を朗読させられたそうだ。つかえたり、どもったりする度に小突かれて、罵られた。……まだ十七歳の若い娘だ。

ヘルガ

その子は今は？

オットー

可愛そうに、よほど怖かったのだろう。部屋から一步も出られなくなったそうだ。……やっと身に染みて分かったよ。この国は狂っている。

ハロルド

それで決心したんですか？

オットー

ああ、そうだよ。

レナーテ

なんの話？

ハロルド

オットーさん、一家でアメリカに行くそうだ。

レナーテ

アメリカ？

オットー

そうさ。実はアメリカで成功した叔父がいる。前から移住を勧められてはいたんだ。叔父やいとこたちのおかげでなんとかビザが取れたんだよ。

レナーテ

そんな……

オットー

レナーテ、だから今日はお別れを言いに来たんだ。君達は長いお得意様で友人だ。……法律ができてからはアリア人の君達に物を売ることもできなくなつたがね。

レナーテ

お店はどうするの？

オットー

もちろん豊んでいくさ。どうせアリア化とやらでそのうち取り上げられる店さ。

ハロルド

そこまでしますか？

オットー

するよ。ナチスはユダヤ人の経済活動を許さなくなるだろう。こうなったら一刻も早くこの国を出るしかない。

ヘルガ

……それが賢明なのかもしれないわね。

レナーテ

でも一家でアメリカ移住なんて大変じゃない。

オットー

ああ。苦勞するのは覚悟してるよ。私達にとっては全くの新天地だし、今から英語を覚えるのも大変だろうな。

レナーテ

それならもう少し慎重に考えても……

オットー

いや、大事なのは命だよ。もう一刻の猶予もない。自分と家族の命を守る為にはドイツを出るしかないんだ。……皮肉なものさ、私は自分のことをドイツ人だと思っていたのにな。

ヘルガ あなたは前の戦争では従軍したわよね？
オットー 二十年前、私はドイツの為を思つて戦つた。そのことを誇りに思つていた。だがナチスの連中にしてみたら私はドイツ人じゃないそうさ。レナーテ、ヘルガ、ハロルド、私がドイツを拒んだんじゃない、ドイツが私を拒んだんだ。もうこの国に私達の居場所はない。

沈黙。オットー、わざと明るい調子で話し出す。

オットー すまない、こんなことをアリア人の君らに行つても仕方ないな。私はただ、今までの友情にお礼を言いたいただけなんだ。君らの健康と幸福を祈つてるよ。寂しくなります。(オットーに握手を求め)

オットー (応じて) 私もだよ。

レナーテ あなたのお店で買うピクルスが一番好きだったわ。(軽いハグ)

オットー ああ、そうだった、君はあれが好きだったな。難を逃れた売り物の中に少し残つていたかもしれない。後で届けさせるよ。

レナーテ え？でも・・・

オットー 売るんじゃないよ、プレゼントだ。それなら大丈夫だろう？

レナーテ ありがとう、オットーさん。

ヘルガ (ハグ) 今日会えて本当に良かった。

オットー ああ、会えて嬉しかったよ。ご両親によろしく伝えてくれ。レナーテ、君のお父様にも伝えるわ。

ヘルガ 伝えるわ。

レナーテ 父も寂しがるわよ。

オットー 他にも挨拶しなきゃいけない人がいる。これで失礼するよ。

ハロルド オットーさん、お元気で。

オットー ……(黙つて考え込む)

ハロルド どうしました？

オットー 友人として忠告させてほしい。ほんの少しでもいい、覚えておいてくれ。

三人 ?

オットー ナチスは本当に危険な政権だ。逆らつてはいけない。・・・だけど近付きすぎてもいけない。できるなら距離を取った方がいい。

三人 (返す言葉が見つからない)

オットー それじゃあ、さようなら。

オットー、退場。三人、顔を見合わせる。転換。

その夜。ハロルド、レナーテ、コンラートが夕食後くつろいでいる。

コンラート そうか・・・オットーがアメリカへ行くのか。

ハロルド ええ。

コンラート あの店は良心的ない店だったな。

レナーテ 子供だったけど、オットーさんのご両親が店を開いた時のこと今でも覚えて
いるわ。

コンラート ワルター夫妻は親切な働き者だった。だからここいらのみんなはあの店を本
当に愛していた。

ハロルド 私はご両親は知りませんが、オットーさんも親切な方でした。店と客の関係で
はなく友人だと思っていました。

コンラート ・・・・なぜそんな人間関係まで政治に干渉されねばならんのだろうな。

レナーテ お父さん、それは仕方ないことでしょう？ドイツ人の血と名誉を守るのは帝
国市民の義務よ。

コンラート お前はオットーが亡命せざるを得なくなった現実を見ても、それが正しいこ
とだと思うのか？

レナーテ そりゃ、彼はお友達だったわ。それでも民族精神は個人的な事情よりも優先す
るべき問題よ。

コンラート 私には分からんよ。かつて確かに彼等は友人であり同胞だった。それなのに今
は昔からの敵同士のようなだ・・・愚かなことだな。

レナーテ ちよつとお父さん、滅多なこと言わないで！

コンラート (鼻で笑って) 私を密告するか？実の娘に密告されるなら致し方ないな。

レナーテ 馬鹿な事言わないで！そんなことするわけないでしょう。

コンラート 冗談だよ、そういきり立つな。私だって自分の身が可愛い。政権批判なんて家
族にしか言えないさ。

レナーテ ・・・・お父さんはナチスの何が気に食わないの？

コンラート ・・・・それを言葉にするのは難しいな。それに今のお前にそれを聞かせても納
得はしないだろう。

ドアノックカーの音。三人、顔を見合わせる。

コンラート こんな時間に誰だ？

レナーテ (腰を浮かせる) 見てくるわ。

ハロルド (立ち上がり) いいよ、レナーテ。僕が行く。

レナーテ ありがとう。

ハロルド、退場。

コンラート レナーテ。

レナーテ なに？

コンラート ハロルドは一家の主だろう。お前が行きなさい。

レナーテ だって、あの人が自分で・・・

コンラート ハロルドの優しさに甘えてはいかん。

レナーテ ごめんなさい。

ハロルド、登場。

ハロルド お義父さん、友人のペーターが訪ねてきたんですが、上げてもいいでしょうか？

レナーテ どうしたの、こんな時間に？

ハロルド 少し話があるとしたか・・・

コンラート かまわんよ、ハロルド。私は部屋で休む。

ハロルド ありがとうございます。(退場しようとしながら) レナーテ、すまない。何か

飲み物をお願いしてもいいかい？

レナーテ 分かったわ。

ハロルド、退場。

コンラート お休み、レナーテ。(退場しようとする)

レナーテ お休みなさい。

コンラート、退場。しばらくして、ハロルド、ペーター、登場。ペーターはSS士官の制服を着ている。

ペーター (少しおどけながら敬礼) ハイルヒトラー。

レナーテ いらっしやい、ペーター。お久しぶりね。

ペーター やあ、レナーテ。こんな時間にすまないね。

レナーテ いいえ気にしないで。コーヒー？それとも紅茶？

ペーター シュナップスカブランデーと言いたいところだが・・・

レナーテ ごめんなさいね、この人も父も飲まないから・・・

ペーター
ではコーヒーを。
レナーテ
分かったわ。(行こうとする)
ペーター
リーザは元気かい？大きくなったろう？
レナーテ
ええ、もう十一よ。
ハロルド
この時間はまだ勉強の時間だ。
レナーテ
そうかそうか。お前に似て勉強好きなんだな。
レナーテ
ペーター、少し待っててね。
ペーター
ありがとう。

レナーテ、退場。ペーター、自分からソファァーに腰を下ろす。

ペーター
もう三年ぶりになるか？
ハロルド
(座る) そうだな、それくらいだ。元気そうじゃないか。それに出世したのか？
ペーター
ああ、SS全国指導者個人幕僚部の所属になったんだ。(袖のカフタイトルを誇示する)

ハロルド
そうか、良かったな。
ペーター
まだまだだよ。ハロルド、SSは良いところだ。能力さえあれば家柄も学歴も問われない。ドンドン出世できるんだ。おかげで代々の靴職人だった俺もこうしてSS中尉となれたわけだ。

ハロルド
おじさんおばさんは元気か？
ペーター
ああ、元気だよ。お前の顔を見たがってたぞ。
ハロルド
親が両方亡くなってからは、シユパンダウには行く機会がないからな。
ペーター
まあ、機会があったらでいい。遠慮せず寄ってくれ。
ハロルド
分かったよ。それで、今日はどうした？

ペーター
ああ、お前に良い話を持ってきたんだ。
ハロルド
良い話？
ペーター
(少し芝居がかった言い方で) 冴えない小学校の歴史教師を続ける幼なじみに、俺は大きなチャンスを与える。

ハロルド
(苦笑) 僕はこれでも今の仕事は気に入ってるんだけどなあ。
ペーター
(無視) アーネンエルベを知っているか？
ハロルド
(首を振る) いいや。

ペーター
SS全国指導者ヒムラー閣下の肝いりでできた研究機関だ。我がドイツ民族がいかに価値のある民族かを学術的に証明する為の研究を行っている。
ハロルド
ああ、そういう機関があるのは聞いているよ。上の方には学会の名だたる教授たちが名を連ねてるそうだね。

ペーター
そうだ。アーネンエルベは来年早々に、正式にSS所属の機関として再出発す

ることに決まった。

ハロルド　へえ、そうなのか。

ペーター　お前もアーネンエルベに、いや、SSに入隊しないか？

ハロルド　・・・え？

レナーテ、コーヒを持って登場。

レナーテ　（二人の前に並べながら）どうぞ。

ペーター　ありがとう。

レナーテ　どういたしまして。私も一緒にいいかしら？

ペーター　勿論さ。

レナーテ　ありがとう。（座る）

ペーター　どうだ？良い話だろう？

ハロルド　いや、意味が分からない。あの機関、アーネンエルベだったけ？確か考古学が中心のはずだ。僕とは専門が違うよ。

ペーター

それならお前に話を持ってくるわけがないだろう。勿論、考古学中心なことは間違いないが、アーネンエルベの研究範囲はそれだけじゃない。我が民族に関わる広い範囲を研究するそうさ。まあ、俺は学術的なことはよく分らんがな。ひよっとして中世ラテン語も範囲に入るのか？

ハロルド

その通り。お前の専門をちゃんと覚えていた俺に感謝しろよ。

ハロルド

・・・具体的にはどんな仕事なんだい？

ペーター

我々SS、特にヒムラー閣下は歴史的に価値のある古文書をお探した。ドイツ民族が、はるか昔から優秀な民族であったと証明できるとびっきりの古文書を。

ハロルド

確かに、それなら専門だが・・・

ペーター

ただの研究員じゃない、SSの隊員として研究に従事できるんだぞ。

レナーテ

SS隊員に！どういうこと？

ハロルド

後で説明するよ。

レナーテ

あなたがSSに入隊できるの？すごいじゃない！

ハロルド

すまないが、ちょっと静かにしていてくれないか。

ペーター

こんないい話ないだろう？お前は専門分野を生かしてSS隊員になり、国家に貢献できる。俺は専門家を速やかに見つけたことを手柄にできる。そして、

レナーテ、君とリーザはSS隊員の家族という名誉を得ることができる。

レナーテ

ありがとう、ペーター。素晴らしい話だわ。あなた、良かったじゃない。

ハロルド

・・・

レナーテ

あなた？

ハロルド 少し考えさせて欲しい・・・
レナーテ ちよつと、あなた・・・

ペーター 分かったよ。ただあまり考えてる時間はないぞ。SSになりたい人間はいくらでもいるんだ。

ハロルド 分かったよ。ただすぐに返事はできない。

レナーテ ねえ、ハロルド、良いお話じゃない？SSになれるのよ！

ペーター 勘弁してやってくれ。こいつは子供の頃から優柔不断な奴なんだ。

レナーテ (愛想笑い) そうね、ペーター。

ペーター また来るよ、ハロルド。それまでに決心してくれ。

ハロルド ああ。

ペーター ただな、よく考えろよ。SSは良いぞ。俺達は新しいドイツのエリート集団なんだ。

ハロルド ……

ペーター それじゃあ、時間も時間だ。これで失礼するよ。

レナーテ ペーター、本当にありがとう。感謝するわ。

ペーター そう言ってくれると、俺も嬉しいよ。邪魔したね。

ペーター、退場しようとする。ハロルドも見送る為についていく。

ペーター (振り返って敬礼) ハイルヒトラー。

レナーテ (敬礼) ハイルヒトラー。

ペーター、ハロルド、退場。レナーテ、コーヒを片付ける。ハロルド、戻ってくる。浮かぬ表情で椅子に座り込む。

レナーテ ねえ、あなた。

ハロルド ……うん？

レナーテ 断るなんて言わないわよね？

ハロルド ……

レナーテ ハロルド？

ハロルド 君は僕がSSになった方が良いと思うんだね？

レナーテ 私はそうなら嬉しいわ。それにね、リーザも喜ぶと思うわよ。

ハロルド ……そうか。

レナーテ 何をためらうことがあるのよ？

ハロルド いや、いい話だとは思うんだ・・・

レナーテ そうでしょう？それにね・・・言いくいんだけど、少しはお給料も上がるん

じゃないかしら？だってSSでしょ？やっぱり小学校の先生よりはもらえるようになるんじゃない？

ハロルド ……それはそうだと思うよ。

レナーテ 今でもあなたは良くやってくれているわ。でも、せっかくのチャンスじゃない？

ハロルド ……

レナーテ 大丈夫、あなたならきっとうまくやれるわ。

ハロルド そうかなあ……

レナーテ きっとそうよ。ね？せっかくお友達が運んでくれたチャンスなの？ちやんと考えてね。

ハロルド ああ……分かったよ。

レナーテ、お盆を持って退場。ハロルド、大きなため息をつく。 転換。

2 1940年7月 フランスの降伏直後

(1)

ある夕方。ハロルドの友人ブルーノが一人でソファに座っている。ブルーノは先天的に左腕に障害を持っている（器具で固定するか、常にぶらんとさせる）。景気のいい音楽と共にラジオが鳴り出す。

15

ラジオの声 去る7月10日、ヴィシーでフランス国民議会が開催された。新しいフランス政府は我が第三帝国を範とし、議会制民主主義を捨て、新体制を構築することであろう。ここにおいて西ヨーロッパにおける我が帝国の敵はイギリスのみとなったのである。忠実なる帝国市民よ、我が総統と我が帝国の偉大なる勝利を共に讃えよう。そしてまた一丸となって戦おう！偉大なる民族による偉大なる国家を建設する為に！

途中で、レナーテが登場。ラジオの音を絞る。

レナーテ ごめんなさいね、もうすぐ帰ってくると思うのだけど。

ブルーノ どうぞお気になさらず。

レナーテ 何やってるのかしら？

ブルーノ 遅れるかもとは言っていましたから。大丈夫です。

レナーテ 今日はどういとお約束？

ブルーノ ハロルドさんに本を貸すように頼まれてるんです？

レナーテ 本？

ブルーノ ええ、仕事に使うそうですよ。今はもうなかなか手に入らない専門書です。

レナーテ あなたが持つてるってよく覚えてたわね、うちの人。

ブルーノ 昔、僕がハロルドさんから譲ってもらった本なんですよ。だから覚えていて当然です。

レナーテ ああ、なるほど。

ハロルドの声 ただいまー。

レナーテ あ、帰ってきたわね。

ブルーノ はい。

ハロルド、登場。SS少尉の制服を着てる。

レナーテ お帰りなさい。ブルーノさんがお待ちよ。

ブルーノ ハロルドさん、お久しぶりです。

ハロルド やあブルーノ、待たせて悪かったね。

ブルーノ いえ、いいんですよ。

ハロルド ごめんなあ、こっちから足を運ばなきゃいけないのに・・・

ブルーノ 元はと言えばハロルドさんの本ですからね。借りてるものを返すだけです。

ブルーノ、荷物から本を一冊取り出してハロルドに渡す。

ハロルド (受け取って) 助かったあ・・・

ブルーノ これですよね？あの時はたくさん譲ってもらいましたから。

ハロルド (本をめくる) うん、間違いないよ。

ハロルド、本に集中してしまう。レナーテ、ブルーノ、顔を見合わせ苦笑いする。

レナーテ じゃあ、私は・・・

ブルーノ はい。奥さん、どうぞお構いなく。

レナーテ ごゆっくり。

レナーテ、退場。沈黙。ブルーノ、手持無沙汰でふらつと歩き出す。ふと振り返り、制服姿のハロルドをじっと見て、眉を曇らす。

ハロルド いやあ、記憶通りだ。どうしてもこれが欲しかった・・・(顔を上げブルーノと目が合う) どうした？

ブルーノ
ハロルド
いえ、なんでもありません。・・・制服姿が見慣れなくて。それだけです。
これか？（苦笑）毎日着てると慣れてしまうよ。不思議なものだ、今じゃこれ
を着ないで表に出るとなんとなく不安になるんだ。

ブルーノ
ハロルド
そういうものですか。僕はこんな体ですからね、そういう制服を着る機会
ね・・・

ブルーノ
ハロルド
僕もつい二年前まではまさか自分がSSの制服を着ることになるとは思っ
ていなかったよ。

ブルーノ
ハロルド
アーネンエルベではどんな仕事をしてるんですか？

ブルーノ
ハロルド
中世ラテン語の古文書をあたって、ドイツ的ゲルマン的に価値の高い物を探
すんだ。

ブルーノ
ハロルド
それは確かにうってつけの仕事ですね。

ブルーノ
ハロルド
実はかなり良い古文書が見つかったんだ。SS全国指導者のお気に入り、ハイ
ンリヒ一世の直筆だよ。

ブルーノ
ハロルド
ああ、ザクセン公ですか。

ブルーノ
ハロルド
彼は西スラブ人を倒したからね。いかにもヒムラー長官好みの英雄なんだよ。

ブルーノ
ハロルド
え？まさかヒムラーの目に留まったんですか？

ブルーノ
ハロルド
そのまさかなんだよ。大喜びだったそうだ。

ブルーノ
ハロルド
すごいですね。

ブルーノ
ハロルド
自分の地味な仕事がかうも簡単に長官にまで届くとは思ってもみなかったよ。
それで早速、その古文書について更に詳細な報告書を作らなければいけな
くなった。それにこの本が必要になったんだよ。

ブルーノ
ハロルド
そういうことですか。

ブルーノ
ハロルド
君のおかげで良い報告書が書けそうだよ。

ブルーノ
ハロルド
お役に立って良かったです。

ブルーノ
ハロルド
本当にありがとう。（再び本に目を落とす）

問

ブルーノ
ハロルド
ヒムラーの目に留まるとどうなるんですか？

ブルーノ
ハロルド
え？

ブルーノ
ハロルド
出世するんですか？

ブルーノ
ハロルド
入隊して知ったんだが、SSというのはかなり実力主義なんだ。家柄よりも学
歴よりも実力だよ。私をSSに誘った友人は前は靴職人だったが、要領が良
く、行動力もある。今や少佐まで進級したよ。あいつは多分もっと上に行くだ
ろうなあ。

ブルーノ
ハロルド
じゃあ今回のお手柄は・・・

ハロルド そのまま進級へと直結しているよ。このままSSに留まるならすぐにも中尉になれると思うんだ。

ブルーノ ……ハロルドさんは出世したいのですか？

ハロルド どうしてそんなことを？

ブルーノ いえ、なんとなくです。

ハロルド したくないと言ったら嘘になるかなあ。家族も我が事のように喜んでくれるだろうし……

ブルーノ そうですか。

ハロルド (ふと寂しそうに) でもねえ……

ブルーノ ?

ハロルド ちよつと聞いてくれるかい？

ブルーノ ええ。

ハロルド 正直を言うと、元の仕事に戻りたいと思わなくもないんだよ……

ブルーノ 気に入ってましたよね、教師の仕事。

ハロルド 僕はね、子供たちに物を教えるのが好きなんだ。

ブルーノ 子供が好きなんです。僕も同じです。

ハロルド 子供に授業をして、合間に趣味として古文書を相手にする。本来はそっちの方が私に向いてるような気がするんだよ……

ブルーノ そうかもしれませんね。

ハロルド ……もしかしたら今なら戻れるかもしれない。

ブルーノ ……

ハロルド 今回の古文書発見の成果を区切りとして、元の生活に戻るか。それとも成果を手土産にして、SS隊員としてあり続けるか。どうしたものかなあ……

問

ブルーノ (敢えて話題を変える) 戦争、どうなりますかね？

ハロルド え？

ブルーノ 今度の戦争、これからどうなりますかね？イギリスを叩いて円満に終戦ってなりますか？

ハロルド 冷静に考えれば、それが一番理想的な形だろうね。

ブルーノ でも、勝ちに酔った我々は冷静になれてませんよ。世界の誰を相手にしても勝てると思ってます。総統や軍人でさえ冷静でないかもしれない。

ハロルド しかし、今のドイツは強いぞ。苦戦はするだろうが負けることはないはずだ。

ブルーノ そこを議論するつもりはありません。ただ、戦争が長引く可能性はあるという

ことです。イギリスの次はどこが相手になりますか？

ハロルド ソ連かアメリカか・・・
ブルーノ どちらにせよ、途方もない大国ですわね。

ハロルド でもアメリカは未だ不介入だし、ソ連とは条約を結んでいるし・・・
ブルーノ アメリカはイギリスを見捨てませんよ。前の戦争でも結局はそうでした。それにソ連の共産主義はナチスの絶対的な敵でしょう？

ハロルド ああ、そうだね・・・なんで不可侵条約なんて結んだんだろうなあ？

ブルーノ ソ連とアメリカが敵国になれば大戦争になる・・・そうならないに越したことはないのですが。総統が冷静であることを心から祈りますよ。

ハロルド ・・・・戦争が続くことを想定して考えるということか。

ブルーノ それともう一つ。

ハロルド なんだい？

ブルーノ、急に黙り込む。

ハロルド どうした？

ブルーノ ・・・・こんな噂を知ってますか？今、ドイツ中の病院や施設から心身障害者が

姿を消しているそうです。

ハロルド え？

ブルーノ 彼等は灰色のバスに乗せられて、どこかに連れて行かれる。そして、誰も帰ってこないそうです。噂ではそれはSSの仕事と言われています。

ハロルド ・・・・初めて聞いたよ。僕の所属とはまるで関わりのないことだ。

ブルーノ そもそもドイツには七年前から「遺伝病根絶法」という恐ろしい法律がある。

噂が本当だとしても僕は驚きません。

ハロルド ブルーノ・・・

ブルーノ 僕にとっては他人事じゃないんです・・・僕もいつ生きるに値しないと判断されることか。

ハロルド そんなことあるわけないよ！君は価値ある帝国市民じゃないか。

ブルーノ その生きる価値の線引きは誰がするんですか？

ハロルド それは・・・

ブルーノ それは人間が引いてはいけない線なんですよ。

ハロルド ・・・・

ブルーノ (調子を変えて) ハロルドさん、僕はあなたを信頼してここまで言いました。だから今話したことは・・・

ハロルド 勿論だ。決して口外はしないよ。

ブルーノ お願いします・・・これ以上はもう何も言いません。

ハロルド うん・・・

ブルーノ　ハロルドさんがSSを続けるべきかどうか。・・・僕の言いたいことは分かってもらえたと思います。

ハロルド　そうか・・・分かったよ。君はやめておけて言いたかったんだな。

ブルーノ　・・・・・・・・

ハロルド　すまない。相談に乗ってくれてありがとう。

ブルーノ　どういたしまして。

ハロルド　・・・・・・・・だが難しいことだよブルーノ。戦争が始まってから、ドイツ社会の中でSSの存在はより大きくなっている。

ブルーノ　進級も決まって、今更大きな船から降りる気にはなれませんか？

ハロルド　家族のことを考えるとね・・・

ブルーノ　その船が沈まないことを祈るしかありませんね。

ハロルド　・・・・・・・・

ブルーノ　まあ、その船が沈む時はドイツも沈むかもしれませんね。

間

ブルーノ　それじゃあ、そろそろお暇します。

ハロルド　ああ、今日はありがとう。

ブルーノ　その本はお返ししますよ。

ハロルド　いいのか？

ブルーノ　ええ。読みたくなったら借りに来ます。

ハロルド　いつでもそうしてくれ。

ブルーノ　はい。

ハロルド、ブルーノの身支度をさっと手伝う。

ブルーノ　ありがとうございます。

ハロルド　そこまで送ろう。さあ。

ハロルド、ブルーノ、退場。転換。

(2)

数日後、昼間。緊張した面持ちでハロルドがうろろしている。ノッカーの音。ハロルド、退場。

ペーター・バウワーの声　ハイルヒトラー。

ハロルドの声　ハイルヒトラー。

ペーターの声　ハロルド、俺の副官のバウワーSS中尉だ。

ハロルドの声　ハロルド・ミュラーSS少尉です。二人とも、どうぞ上がってください。

ハロルド、ペーター、ペーターの副官バウワー、登場。

バウワー　少佐、外でお待ちしましょうか？

ペーター　ここにいてくれてかまわないぞ。

バウワー　はっ。

バウワー、入り口の脇に立つ。ペーター、自分からソファーに座る。ハロルドもそれを追いかけてながら。

ハロルド　いいのかい？

ペーター　何がだ？

ハロルド　中尉にも座ってもらわないと・・・

ペーター　気にするな、中尉はああしたくてああしてるんだ。

ハロルド　しかし、僕からしたら上官だから・・・

ペーター　俺達一般SSは軍隊じゃない。公式の場ならともかく、こういう席ならあまり気にすることはないさ。

ハロルド　・・・そういうものか。

ペーター　そんなことよりハロルド、お前の中尉進級が正式に決まったぞ。

ハロルド　そうか。

ペーター　たったの一年半だぞ。俺の言う通り、SSは良いところだろう？

ハロルド　ああ、そうだな・・・

ペーター　どうした？嬉しくないのか？

ハロルド　そんなことはないよ。

ペーター　何とんでもあの古文書がヒムラー長官の目に留まったのがでかかったな。

報告書はもう提出したのか？

ハロルド　ああ、昨日提出したよ。次はゲルマニアにあの古文書について論文を載せることになった。

ペーター　ゲルマニアってのは何だったかな・・・

ハロルド　アーネンエルベの機関紙だよ。読んでないのか？

ペーター　すまんすまん、俺にはちよつとああいうのは難しくくてな。

ハロルド　君はSS全国指導者個人幕僚部だろう？

ペーター 俺の担当はアーネンエルベのことばかりじゃないんだよ・・・しかし、その論
文がまた長官の目に留まれば、今度は大尉への道が開けるといわけだな。

ハロルド

ペーター どうした？またそんな顔して。

ハロルド なあペーター、友人として君と話したいんだが。

ペーター なんだよ改まって？

ハロルド 正直を言うと、僕はこのままSSに留まるかどうか迷ってるんだ。

ペーター なんだと？やめてどうするんだよ？

ハロルド 勿論、元の歴史教師に戻るだけだよ。

ペーター 冗談だろう？

ハロルド 僕がこんなことを冗談で言うわけないだろう？

ペーター ああ、そうだな。お前はガキの頃からそういう悪ふざけが嫌いだった・・・

ペーター なら、お前本気で言ってるのか？

ハロルド だからそう言ってるじゃないか。

ペーター 呆れた奴だな、お前は。

ハロルド

ペーター レナータやリーザはなんて言ってる？

ハロルド まだ相談してない。と言うより、当然SSを続けるものだと思うてる。

ペーター 言えば分かってくれると思うのか？

ハロルド いや、反対するだろうな。

ペーター まあそうだろうな。

ハロルド

ペーター 何が？

ハロルド 奥さん、ちょっと嫌になるくらい楽観的に国家社会主義者になってないか？

ペーター お前のところはそうなのか？

ハロルド

ペーター あのなあ、俺も女房も政権獲得前からの党员だぞ。

ハロルド ああ、そうだったな。

ペーター でも言ってることは分らんでもない。我が総統は昔から女性からの支持を

大事にしていた。清潔で無欲ってイメージを守ってるのもその為だ。

ハロルド

ペーター 同僚の女房と会うと、大概が旦那以上のこちこちの国家社会主義者だったり

する。お前が言いたいのはそういうことだろう？

ハロルド やっぱりそういうものなんだな。

ペーター 例えばお偉いさんの女房だってそういうタイプいるだろう？

ハロルド

・・・ゲツベルス婦人。

ペーター そうだ。マグダ・ゲツベルスなんてのは典型的だな。まあ、俺たちの知ってる姿がどこまで本物かは分からんがね。

ハロルド 夫は「プロパガンダの天才」ヨーゼフ・ゲツベルスだからなあ。
ペーター 総統は女性を第二の性と言ってる。家事と子育てで家にいる女ってのは、案外、ナチスにとってはお得意さんなのかもしれないな。

ハロルド リーザもドイツ少女同盟でみっちりと仕込まれてるよ。
ペーター 正しいドイツ人少女のあるべき姿じゃないか。

ハロルド ……それはそうなんだが。

ペーター おい、ハロルド、問題はレナーテとリーザじゃない。お前がSSを抜けたいつて思ってることが問題なんじゃないか？

ハロルド ……

ペーター 考えてもみるよ、今やSSは正真正銘、ドイツ社会のエリート集団だ。武装SSは軍隊、ゲシュタポは警察、一般SSにはお前のような学者までいる。今更だが、SSはそれ自体が国家みたいなもんさ。

ハロルド 僕のような末端にいる人間には、SSの全体像はとてつもないが掴めない。

ペーター それは俺だってそうだ。だが一つ言えることは、戦争が激しくなればなるほどSSの権力は強くなる。

ハロルド そうだろうか？

ペーター 戦争の遂行に必要なのは統制だよ。ゲシュタポの緻密で巨大な警察組織を抱えているSSは最強だ。SSを無視できるドイツ人はいない。(声を潜め)我が総統だってそうだぞ。

ハロルド ……

ペーター 想像してみるとよ、ハロルド。お前が手にしようとしているSS中尉という地位を一般の帝国市民がどれだけ欲しがっていることか。この制服を身に纏えるステータスをお前は手放そうというのか？友人として言わせてもらうよ、馬鹿なことは考えるな。

ハロルド ……君の言ってることは分かるんだ。

ペーター まあ、ナチス以前のドイツを覚えているか？

ハロルド 勿論だ。

ペーター 今より豊かだったか？今より誇りに満ちていたか？今より民族全体が一丸となっていたか？

ハロルド ……そうは言いにくいな。

ペーター そうだ。今よりも全てにおいて良くなかった。軍人の子は軍人。役人の子は役人。社長の子は社長。上流階級は固定されて、庶民の子の入る隙間はなかった。違うか？

ハロルド いや、その通りだ。

ペーター お前は教師の息子で、俺は貧しい靴職人の息子だ。だが俺は靴職人じゃないし、お前も今は教師じゃない。しかも、もつと上に昇ることだって許されている、それはなぜだ？

ハロルド 僕と君がSSの隊員だからか？

ペーター その通りだ。我が総統が膠着したドイツの社会秩序を一新した。ヒムラー長官はその新しいドイツの担い手としてSSという組織を作り上げた。我々はドイツの長い歴史の中で最も偉大な時代を生きて、しかもその最先端を走る組織に属しているんだ。それがどれほど恵まれていることか、分からないわけじゃないだろう？

間

ハロルド 分かったよ、ペーター。つまらないことを言ってすまなかった。

ペーター 分かってくればいいんだよ。ガキの頃からの付き合いじゃないか。

ハロルド ああ。

ペーター 中尉進級を受けてくれるな？

ハロルド 勿論だよ。

ペーター 良かった。一週間もせずに正式な通知が来る。まあ、それまではあまり大っぴらにはしないように。

ハロルド 分かった。

ペーター 家族を喜ばせるくらいはかまわんからな。レナーテとリーザを喜ばせてやれ。

ハロルド ああ、ならそうせてもらおうよ。

ペーター (パウワーに) 中尉。

パウワー はい。

ペーター 車を回しておいてくれ。

パウワー は！ (敬礼) ハイルヒトラー！

二人 (敬礼) ハイルヒトラー！

パウワー、退場。

ペーター まあ、ハロルド。

ハロルド なんだ？

ペーター アーネンエルベ以外の部署に異動する気はないか？

ハロルド え？

ペーター どうだ？

ハロルド しかし、私は専門知識を買われてあそこに・・・

ペーター (遮って) よそに専門知識が必要な部門があったらどうだ？

ハロルド ……それなら断る理由はないな。

ペーター あそこも長官の関心ある部署だが、今は戦争中だ。花形の部署とは言えない。

ハロルド 戦争中の花形ってまさか武装SSやゲシュタポじゃないだろうな？

ペーター まさか！確かにその二つは花形だが、それだけじゃない。戦争には絶対に金が
必要だ。俺はなんとか機会を作って経済関係の部局に移るつもりだ。

ハロルド そんなことができるのかい？

ペーター 結局、一般SSは官僚組織だからな。なかなか難しいよ。だが俺は何としても
やるつもりだ。その時はお前も引っ張ってやるよ。

ハロルド 私にできることがあるとは思えないが・・・

ペーター それは俺が考えてやるよ。まあ、心積もりだけはしておいてくれ。

ハロルド ……分かったよ。

ペーター じゃあな、中尉。(握手)

ハロルド (応じて) まだ少尉だよ。

ペーター、退場。ハロルドも見送る為に退場。 転換。

3 1942年7月 「最終的解決」により絶滅収容所が稼働を始めた時期

(1)

ヘルガが一人でソファアに座っている。ラジオから昨年より続く独ソ戦に関するプロパ
ガンダ放送が流れている。

ラジオの声 我がドイツ民族の存亡を賭けた共産主義との戦いが始まり、既に一年という
時間が経過した。しかし、我が総統、我が党、我が国民の軍であるドイツ軍は
英雄的な戦いをロシアの地で繰り広げている。我が総統はこう言った「ロシア
の地は我がドイツ民族に必要な生存圏である」。国家に忠実なる我が帝国市民
よ、心を前線で戦う我が軍の兵士たちと一つにしようではないか！我々はド
イツ民族の未来の為に、全国民が一丸となって戦わなければならないのだ！

途中でコンラートが入ってくる。コンラート、演説が終わり「旗を高く掲げよ」が流れ出
すとラジオを消す。

コンラート (ぼつりとぼやく) 歴史は繰り返すとはこのことだな・・・

ヘルガ どういう意味です？

コンラート そのままの意味さ。古くはナポレオン、近いところでは前の大戦でも、ロシア

に攻め込んだ軍は最終的にはどうなった？

ヘルガ それは・・・お答えしにくい質問ですね。

コンラート 歴史に学ばぬ者は愚かだ。教師時代は、口を酸っぱくして子供たちに教えたものだったが・・・

ヘルガ 親戚にも友人にも、東部戦線で戦ってる人がいます。無事に帰ってきてほしいといつも祈ってます。

コンラート まったく、その通りだな。

沈黙。レナーテ、コーヒーセットを持って登場。カップをそれぞれ置いていく。

レナーテ お待たせ、ヘルガ。

ヘルガ ごめんなさいね。ありがとう。

レナーテ どうぞ召し上げられ。

コンラート (一口飲んで苦い顔をする)

ヘルガ (飲んで) あれ？これは・・・

レナーテ タンポポコーヒーよ。

ヘルガ 代用品ね。

レナーテ 慣れるといけるわよ。(自分も飲む) お父さんは気に食わないようだけど。

コンラート 当たり前だ。こんなものコーヒーの代わりにもならんよ。

レナーテ 仕方ないじゃない。コーヒー豆は贅沢品でしょ？帝国市民たる者、儉約には率先して取り組まないと。

ヘルガ 立派ね。

レナーテ SS大尉の妻ですから。

ヘルガ あら？大尉？出世したの？

レナーテ そうなのよ。今年の二月に新しい本部に移動になってね、その時に進級したの。

ヘルガ へえ、ハロルドがSS大尉ねえ。新しい本部って？

レナーテ えっと、経済なんとかって言ったわね。

コンラート 経済管理本部だ。

ヘルガ どんな仕事？

レナーテ 機密だからって話してくれないのよ。でもね、専門知識を役立ててるそうよ。

ヘルガ 専門って歴史の知識？

レナーテ そうよ。

ヘルガ 経済と何の関係があるのよ？

レナーテ それは私にも分からないわよ。

ヘルガ ……

レナーテ それよりも、次の冬までにはソ連に勝てるかしらね？

ヘルガ え？

レナーテ だって去年はモスクワまであとちょっとまで進軍したんでしょ？冬の攻勢は撃退したって言うし、今度はこっちが攻める番じゃない。きっと今年こそはモスクワに・・・

コンラート (遮って) そんな簡単にいくわけないだろう。

レナーテ どうしてよ？ドイツ軍は世界最強よ。赤軍に負けるわけがないわ。

コンラート お前は気楽でいいなあ。

ヘルガ どうとうアメリカも参戦したし、どうなるかしらね。

レナーテ その分日本がアジアで戦ってくれてるでしょ？

コンラート (黙ってため息)

レナーテ 何よ？

ヘルガ もし、フランスに連合軍が上陸してきたら、私達は前の戦争と同じ挟み撃ちにあうわね。

レナーテ そんなことあるわけないでしょ。ソ連さえ倒せば、きっと休戦の交渉もできるよようになるんじゃないかしら。

コンラート そううまくいくかね？

レナーテ 我が総統が勝利に導いてくれるわ。

間

ヘルガ そうね、レナーテ。あなたの言う通りよ。私もドイツが勝って信じてるわ。

レナーテ 当然よ。その為に我慢してこんなものまで飲んでるんだから。

コンラート ・・・せめてコーヒーくらい、本物を飲ませてもらいたいもんだ。

レナーテ お父さんね、アイントプフが気に食わないのよ。

コンラート そんなことない。

レナーテ 夕食がアイントプフだとむっつり黙りこんじゃうのよ。

ヘルガ 女としちゃ楽なんだけどね。あるものをスープに投げ込むだけだから。

レナーテ それはそうよね。でも夕食を節約するのは戦争に協力する為で、私が楽したいわけじゃないのよ、お父さん。

コンラート スープが嫌だと言ってるんじゃない。週に一度、日曜の夕食があれだけというのが気に食わんだ。日曜の晚餐はせめてもの贅沢をとというのが、ドイツ人の伝統なんだ。

レナーテ 戦争遂行の為に我慢しましょう。戦争が終わったら、また日曜の夜にちょっと贅沢することだってできるよになるわ。

コンラート その時まで私が生きていればの話だな。

レナーテ 何言ってるのよ、その年で食事に文句付けられるんだったら、まだまだ大丈夫

コンラート　でしようよ。育ち盛りのリーザだって我慢してるってのに、意地汚い。
意地汚いとはなんだ！

ヘルガ　言い過ぎよ、レナーテ。コンラートおじさん、いつまでも元気でいてください
ね。

コンラート　・・・娘がいい歳してこんな脳天気だからな。おちおち死んでもいられんよ。
レナーテ　またそんなこと言って。

ヘルガ　（カップを飲み干す）

レナーテ　お代わりいる？

ヘルガ　結構よ。ありがとう。

コンラート　好き好んでタンポポコーヒーなんぞ飲めるか・・・

レナーテ　飲めるわよ。体にも良いのよ。

ヘルガ　ところでね・・・

レナーテ　どうしたの？

ヘルガ　ミュンヘンのお友達で、旦那さんと一緒にポーランドに入植した人がいるの。

最近ね、一週間だけ里帰りしてきたから、こんな風と一緒にお茶を飲んだんだ
けれど・・・

レナーテ　どうしたの？

ヘルガ　そのお友達からね、変なことを聞いたの。

レナーテ　変なこと？

ヘルガ　うん・・・

間

レナーテ　どうしたのよ？ヘルガ？

ヘルガ　ゲットーからどんどんユダヤ人が消えてるんですって？

レナーテ　え？

ヘルガ　ユダヤ人をゲットーに隔離するのがドイツの国策でしょう？

レナーテ　その通りよ。

ヘルガ　だけど何カ月か前から、ゲットーのユダヤ人が減ってるんですって。一番大き
なワルシャワゲットーでさえそんな有様なんですって。

コンラート　そのユダヤ人はどこに行くんだ？

ヘルガ　それが分からないんです。お友達も見当もつかないって言ってました。

コンラート　そうか・・・

ヘルガ　でも一度だけ見てしまったそうなんです。

レナーテ　何を？

ヘルガ　まだ明け方とも言えない深い時間に、大勢のユダヤ人の行列が街から出てい

くのを。周囲は武装したSSの部隊に嚴重に囲まれていたそうよ。

コンラート その行列はどこに向かったんだ？

ヘルガ それも分かりません。怖くなってすぐに見るのをやめてしまったって言ってみました。

レナーテ 不思議な話ね。なんでそんな時間に移動させる必要があるのかしら？

コンラート ・・・人目につかないようにだろう。

レナーテ どうしてユダヤ人の移動を隠さなきゃいけないの？それはユダヤ人を追放するっていう総統の政策の一環でしょう？

コンラート 人目から隠すってことは、やましいことがあるんだろう。

レナーテ なんてことを言うの？そんなことあるわけない！

コンラート ・・・ああ、お前にとってはそうなのかもな。

レナーテ どういう意味？

ハロルドの声 ただいまー。

ハロルド、登場。制服姿。少し憔悴した様子。

三人 (口々にお帰りを言う)

ハロルド ただいま戻りました。いらつしやい、ヘルガ。

ヘルガ お邪魔してるわ。ちよつと疲れてるようね。大丈夫？

ハロルド 少し、仕事が忙しくてね。

レナーテ ねえ、ちよつと聞きたいことがあるんだけど。今いいかしら？

ハロルド なんだい？(椅子に腰かける)

レナーテ ヘルガのお友達がポーランドで見えたことなんだそうだけど。

ハロルド ああ。

レナーテ ゲットーからユダヤ人が消えてるんですって。ユダヤ人はどこに行くの？あなた知ってる？

ハロルド ・・・(明らかに蒼ざめて固まる)

レナーテ あなた？

沈黙。ヘルガ、コンラートはハロルドの様子から何事かを察する。

レナーテ ねえ？ハロルド？

ハロルド ・・・あ、ああ。すまない。ぼーつとしてしまった。

レナーテ ちよつと大丈夫？

ハロルド ああ、心配いらぬ。・・・機密に関することだから、はっきりとは言えないし、秘密にしておいてもらいたんだけど。

レナーテ 何？

ハロルド 東方の占領地にドイツ企業が工場をどんどん作っている。彼等はその労働力として送られているんだ。軍需工場も多いが、民生用の日用品なんかも東方の工場で作られるようになったんだ。

レナーテ ああ、なるほど、そういうことなのね。

ハロルド 納得したかい？

レナーテ ええ、ありがとう。あなたの経済管理本部っていうのはそういうことを管理してるのね。

ハロルド それだけじゃないが、主な仕事の一つではあるよ。

レナーテ 戦争遂行には欠かせない大事な仕事ね。

ハロルド レナーテ、他言無用だよ。

レナーテ 分かってるわよ。

ヘルガ (立ち上がって) レナーテ、そろそろお暇するわ。

レナーテ あらもう？

ヘルガ ええ、明日早くにミュンヘンに帰るから。帰って荷造りしないと。

レナーテ そう……。また里帰りする時は教えてね。

ヘルガ 勿論よ。コンラートおじさん、お元気でね。

コンラート ああ、ご両親によく伝えてくれ。

ヘルガ はい。ハロルドも元気で。

ハロルド ……。(暗い顔で考え込んでいる)

レナーテ ハロルド？

ハロルド (立ち上がる) ああ、すまない。元気で。(ヘルガと握手)

ヘルガ (応えて) また会いましょう。

ハロルド ああ。

レナーテ 送っていくわ。

ヘルガ ありがとう。

レナーテ、ヘルガ、退場。ハロルド、暗い顔に戻り、再び座り込む。コンラート、その様子を見て、声を掛ける。

コンラート ハロルド……

ハロルド はい。

コンラート さっきの話は本当なのか？

間

ハロルド 本当です。
コンラート ……そうか。

間

コンラート 変なことを聞いてすまなかったな。

コンラート、退場しようとする。ハロルド、その背中に声を掛ける。

ハロルド お義父さん……

コンラート (立ち止まって) どうした？

ハロルド ……さっき言ったことは嘘ではありません。

コンラート ああ。

ハロルド でも……完全に本当のことというわけでもないんです。

コンラート ……どういう意味だね？

ハロルド (苦し気に顔を歪め) それは……言えません……知らない方が良いでしょう。

コンラート ハロルド……

ハロルド お義父さん申し訳ありません。聞かなかったことにしてください。

コンラート 君がそう言うならそうしよう……あまり無理をするなよ、ハロルド。

ハロルド はい。ありがとうございます。

コンラート、退場。ハロルド、ラジオのスイッチを入れる。ドイツ軍歌『パンツァーリート』が流れる。

ハロルド (自分に言い聞かせる) 私の仕事は偉大なるドイツに必要なことなんだ……

転換。

(2)

数日後の午後。ハロルドとブルーノがテーブルを挟んでいる。テーブルの上には古い本が数冊積んである。

ブルーノ 一応、思いつく物は全部持ってきましたよ。

ハロルド ありがとう、ブルーノ。助かるよ。(手に取りパラパラめくる)

ブルーノ でもこれ仕事で使うんですか？全部古本の目録ですよ？

ハロルド ああ、これが欲しかったんだ。本当にありがたいよ。
ブルーノ そうですか・・・

ハロルド、本の確認を続ける。

ブルーノ (冗談めかせて) 古本屋に転職するのかと思いましたが、そういうわけでもないようですね。

ハロルド まあ、似たような仕事なんだが。

ブルーノ でもSSの仕事でしょう？

ハロルド 送られてくる膨大な古書の中から、価値のある物を選別する仕事だよ。

ブルーノ 送られてくる？どこから？

ハロルド ……東の方だ。

ブルーノ 東・・・ポーランドですか？

ハロルド すまない、機密なんだ。

ブルーノ そうですよ、話せることじゃないですね。それにあまり気持ちのいい話でもなさそうです。

ハロルド しかし・・・祖国の為に、誰かがやらなければいけない仕事なんだ。

ブルーノ ハロルドさんは、東方占領地には行きましたか？

ハロルド いや、まだその機会はないな。私は内勤ばかりだからね。

ブルーノ その制服からはイメージできないですね。

ハロルド 武装SSとは違うよ。一般SSは要するに官僚組織なんだ。
ブルーノ なるほど。

ハロルド 君はポーランドへ行ったのか？それとも行く予定が？

ブルーノ いや、僕じゃありません。ただ元教え子が何人も。女の子でも、結婚相手に付いて行ったり、SS隊員の秘書として行った子もいるんです。

ハロルド ドイツ人の入植は東方政策の柱だよ。東方は我がドイツ民族にとって母なる大地なんだ。

ブルーノ ……でも。

ハロルド ん？

ブルーノ ポーランドはポーランド人の、ロシアはロシア人の母なる大地じゃありませんか？

ハロルド ……ブルーノ。

ブルーノ すいません。本気じゃありませんよ、不用意な発言でした。

ハロルド 考えてみてくれ、我がドイツ民族の安定した未来の為に、東の穀倉地帯はどうしたって必要な土地なんだよ。

ブルーノ 勿論、総統の政策は理解しますよ。

ハロルド (半分自分に言い聞かせるように) 東方、特にウクライナの農産物によって、ドイツ人が飢えることはもうなくなるんだ。これはどうしたってやらなきやいけないことなんだ。

間

ハロルド すまない、少し熱くなってしまった。
ブルーノ 僕の方こそすいませんでした。
リーザの声 ただいまー！
ロッテの声 お邪魔しまーす！
ブルーノ 娘さん、いくつになりました？
ハロルド もう十五だ。
ブルーノ 早いもんですね。
ハロルド まったくだ・・・

リーザ、ロッテ、登場。リーザは部屋に入ってくるが、ロッテは入り口で立ち止まり、敬礼をする。

ロッテ ハイルヒトラー！
リーザ (慌ててロッテに倣う) ハイルヒトラー。
ハロルド・ブルーノ (やむなく立ち上がり) ハイルヒトラー。
ロッテ 駄目じゃないリーザ。
リーザ ごめん、ロッテ。
ブルーノ 久しぶりだね、リーザ。
リーザ お久しぶりです、ブルーノさん。
ブルーノ ちょっと見ないうちに大きくなった。
リーザ はい！
ロッテ リーザ。早く準備しないと。
リーザ 分かった、ちょっと待ってて。ブルーノさん、失礼します。

リーザ、退場。

ハロルド ロツテ、今日は何があるんだい？
ロッテ 今日はドイツ女子同盟の体育訓練の日です。
ブルーノ ああ、ヒトラーユーゲントの訓練か。放課後なのに大変だね。
ロッテ いいえ。「健康な男子は健康な女子から産まれる」です。ドイツ民族の未来の

為に、私達は健康な体を作らなければいけません。

ブルーノ

立派なもんだねえ。

ハロルド

なあ、ロツテ。

ロツテ

なんですか？

ハロルド

リーザは運動が苦手だ。しごかれてるんじゃないか？

ロツテ

そうですね、確かにリーザは足も遅いし、訓練ではあまり活躍できません。でも女子同盟は連帯して訓練します。おじさん、リーザには私がちゃんとついてますから心配しないでください。絶対にお友達のリーザを脱落させません。

ハロルド

あ、ああ。お手柔らかに頼むよ。

ロツテ

はい。

リーザ、体操着の入った袋を持って登場。

リーザ

お待たせロツテ。

ロツテ

早かったわね。

リーザ

うん、急いだよ。

ロツテ

ねえ、おじさん。一つ聞いていいですか？

ハロルド

なんだい？

ロツテ

おじさんは戦争に行かないんですか？

ハロルド

私は一般SSだからね。武装SSのように戦場に行くわけじゃないんだ。

ロツテ

そうなんですか・・・

リーザ

父さんは戦争遂行に必要なことをしてるのよ。戦場に行くだけが戦争じゃないわ。

ロツテ

私の兄は徴兵されて国防軍に入隊しました。どうせだったら武装SSに志願

すれば良かったのに。

ハロルド

どうして？国防軍だって我が帝国の為に戦ってるのは同じだろう？

ロツテ

でもSSの方がカッコいいじゃないですか。やっぱり制服からして国防軍よ

り良いですよ！

ハロルド

・・・

ロツテ

いいなあ、リーザは。お父さんがSSで。

リーザ

(はにかむ)

ロツテ

女もSSに入隊できれば良かったのに。

リーザ

え？

ロツテ

私も我が總統の為に戦いたい！あなたもそう思わない？

リーザ

え？あ、でも・・・

ロツテ

民族の為、總統の為に銃を取るのよ！素晴らしいじゃない！

リーザ ええ、そうね。そうなったら素敵ね。

ロッテ おじさん、武装SSは女性部隊を作らないんですか？きつと大勢志願すると思えますよ！

ハロルド いや、それはどうだろうな。(返答に困る)

ブルーノ (助け舟を出す) それは総統のご意志に逆らうことになるよ。

ロッテ なんですすか？

ブルーノ 女性の第一の仕事は良き妻、良き母となって、未来のドイツ民族を生み育てることだろう？ドイツ女子同盟でも繰り返しそう教えられているはずだよ。

ロッテ はい……。でも私は戦いたいんです。

ブルーノ それは残念だけど、きつと君が大人になる前に戦争は終わるよ。今に勝利の日が来る。そうなったら帝国の未来を担うのは若い君達だ。それに備えて知性と体を鍛えるのが、ドイツ少女としての正しいあり方なんじゃないかな？

ロッテ ……はい。確かに仰る通りです。

ブルーノ 賢い子だね。

リーザ ねえロッテ、そろそろ……

ロッテ あ、そうね。行きましょう、リーザ。

リーザ うん！じゃあ行ってきます。

ロッテ お邪魔しました。

ハロルド リーザ。

リーザ 何？

ハロルド しっかりと訓練しておいで。

リーザ はい、父さん。

ブルーノ 二人とも、ケガしないようにね。

リーザ ありがとう、ブルーノさん。

リーザとロッテ、退場しようとして、出口付近でくるっと振り返り、敬礼。

リーザ・ロッテ ハイルヒトラー！

ハロルド・ブルーノ ハイルヒトラー。

リーザ、ロッテ、退場。沈黙。やがてブルーノがボソツと口を開く。

ブルーノ なるほど、時代を担う若者たちは着実に教育されていますね。

ハロルド ああ、ヒトラーユーゲントの影響は大きいな。

ブルーノ (少し皮肉を込めて) さすが我が総統ですね。リーザ達も立派な国家社会主義者だ。親としても心強いのでは？

間

ハロルド　なあブルーノ、君はなんで結婚しないんだ？

ブルーノ　・・・しないんじゃないんですよ、できなかったんです。

ハロルド　そうなのか？

ブルーノ　障碍者ですからね。本人同士が良くても親が許しませんよ。いや、まあ、そう

いう対象として見てくれる女性自体、今はほとんどいませんが。

ハロルド　障碍と言ったって君の場合は・・・

ブルーノ　分かりやすいもんです。九年前、ナチスが政権を取るまではそうでもなかった

んですよ。僕にも恋人がいたんです。でも・・・(自嘲して)後は言わせない
てください。

ハロルド　すまなかった・・・

ブルーノ　いいんです、もう諦めてますから。

間

ブルーノ　僕、転職しようと思ってるんです。

ハロルド　え？

ブルーノ　工場を経営している友人に助けってもらって、熟練工の身分証明をもらうつもりです。

ハロルド　そんなことしなくても、君はもう勤続十年以上のベテラン教師じゃないか。

ブルーノ　歴史教師の肩書より、熟練工の身分証の方が僕の身を守ってくれるはずで

そうでしょう？軍にも入れず、生産性のない障碍者はドイツのお荷物ですか
らね。

ハロルド　・・・ブルーノ。

ブルーノ　ドイツは確かに甦った。それは認めます。だけど、僕のような人間には冷たい
社会になりました。自分の身は自分で守らないと・・・

ハロルド　もし、私にできることがあったら言ってくれ。力になるよ。

ブルーノ　その時はお願いします。SS大尉のお力添えは頼りになります。

ハロルド　ああ。遠慮なんかしないでくれよ。

ブルーノ　ありがとうございます、先輩。

ブルーノ、ハロルドに握手を求め、ハロルドが応じる。転換。

4　1944年　9月上旬　敗色濃厚となった時期

(1)

ハロルド、レナーテ、リーザ、コンラート、テーブルに座っている。夜、夕食の最中である。ラジオからは不利な戦況を隠すように威勢のいい宣伝相ゲツベルスの演説が流れている。

ラジオの声 偉大なるドイツ国民諸君。前線で薄汚い共産主義者と戦う英雄たちの思い出は我々に痛切なる義務を思い起こさせる。国家社会主義で教育され、訓練されたドイツ国民は完全なる真実に耐えることができる！国民は我がドイツがいかにかに困難な状況にあるかを知っている。今は全てがどうしてそうなったかを問う時ではない。ドイツ国民は今や我が総統と苦楽を共にする決意を固めている。銃後と前線が一つになった国家はどんな敵にも打ち勝てるのだ！

「旗を高く掲げよ」が流れる。

レナーテ リーザ。

リーザ はい。(ラジオを切る)

コンラート ……景気の良いことばかり言うが、具体的には何も言っていないのと同じだ。いよいよ、苦しくなってきたな。前の戦争を思い出すよ。

リーザ おじいちゃん、苦しいのは敵も同じなの。宣伝相も仰ってたでしょ？どうしてそうなったかを問う時じゃないのよ。

コンラート では優秀なドイツ国民はどうすればいいんだね？

リーザ それも宣伝相が仰っていたわ。銃後と前線が心を合わせて戦うのよ。

コンラート ……そうすれば勝てるのか？

リーザ 当たり前じゃない！

コンラート ソ連にもアメリカにもイギリスにも勝てるのか？

リーザ 当然よ、我が総統が勝利に導いてくださるわ！

コンラート (大きなため息) ……ごちそうさま。

リーザ おじいちゃん、ジャガイモ食べないの。ならちようだい。

コンラート (皿をリーザに渡して) 食卓にはいつもキャベツとジャガイモだ。食欲もなくなるというものさ。

リーザ (むしやむしや食べながら) この体は総統のものよ。健康は義務なの。だからなんでも食べなくちゃ。

コンラート 肉なら喜んで食べるがね。

リーザ 肉食は体に毒よ。少女同盟でも「肉を食べ過ぎると病気になる」って習ったわ。

コンラート 病気になるほど肉を食べ過ぎたいもんだ……

レナーテ　今は非常時だから、肉屋に行ってもなかなかお肉は売ってないのよね。

ハロルド　ごちそうさま。

リーザ　ごちそうさまでした。

レナーテ　はい、お粗末様でした。

コンラート　(ぼやく) まさしくそうだな・・・

レナーテ　何か言ったかしら？

コンラート　何でもない。

コンラート、とぼとぼと退場。レナーテは食器を片付ける。リーザがハロルドに話しかける。

リーザ　ねえ、父さん。

ハロルド　なんだ？

リーザ　父さんはどう思う？

ハロルド　なんのことだ？

リーザ　ドイツは勝つわよね？

ハロルド　勝てるさ。負けるわけがない。ドイツは不滅だ。

リーザ　でしよう？

ハロルド　ああ、我々は総統を信じればいいんだ。

リーザ　はい、父さん。

ノッカーの音。レナーテが台所から戻ってくる。

ハロルド　こんな時間に誰だ？

レナーテ　見てくるわ。

ハロルド　ありがとうございます。

レナーテ、退場。やがて玄関からレナーテの驚く声が聞こえる。

レナーテの声　大佐！どうしたんですか？こんな時間に？さあ、ともかく上がってください！

ハロルド　ペーターか・・・

レナーテが先導して、ペーターが登場。リーザが張り切って敬礼をする。

リーザ　ハイルヒトラー！

ペーター (敬礼) ハイルヒトラー。久しぶりじゃないか、リーザ。すっかりきれいに
なったね。

リーザ ありがとうございます！大佐！

ペーター (笑って) ペーターおじさんでかまわないよ。君の父さんは俺の幼なじみだからね。

リーザ はい。ペーターおじさん。

ハロルド ペーター、出張中じゃなかったか？

ペーター ついさつきベルリンに戻ったんだ。少し急ぎの話があるんだ。(目配せ)

ハロルド (軽くうなずき) レナーテ、リーザ、ちよつと外してもらえるか？

リーザ 分かったわ。失礼します、ペーターおじさん。

ペーター すまないね、リーザ。

レナーテ あなた、何もお出ししなくても・・・

ペーター お構いなく、レナーテ。

ハロルド 大丈夫だ、外してくれ。

レナーテ 分かりました。ペーターさん、ごゆっくり。

ペーター ありがとう。

レナーテ、リーザ、退場。ペーター、一転沈んだ表情でソファアに座り、ため息をつく。

ハロルド ポーランドはどうだったんだ？

ペーター ……

ハロルド ペーター？

ペーター 酷いもんさ。赤軍が何故か進撃をやめてくれたおかげで、ワルシャワは保たれた。だが次の攻勢があったらポーランドどころか、ドイツ本国まで赤軍は攻め寄せてくるだろうな。

ハロルド 何を言ってるんだ？

ペーター お前、今何をやってるんだ？もう古本漁りじゃないんだろう？

ハロルド ああ。今は撤退した収容所から引き揚げた物資の再分配をしているよ。

ペーター まったくの専門外じゃないか。

ハロルド 命令だからな。それは諦めているよ。

ペーター まあ、しかし、それなら都合がいいか・・・

ハロルド どういう意味だ。

ペーター こっちの話だよ。それはともかくハロルド・・・冷静に聞いてくれ。ここだけの話だ。

ハロルド なんだよ？

問

ペーター 我々は遠からず負けるぞ。

ハロルド ……え？なんて言った？

ペーター 第三帝国はおしまいだよ。もうこの戦争に勝ちの目はない。

ハロルド ……

ペーター なあハロルド、俺達は戦後のことを考えなきゃいけない。そうは思わないか？

ハロルド ……

ペーター どうした？

ハロルド 思わない。思うわけがない。ドイツは決して負けない。

ペーター 目を覚ませハロルド！まさか国と心中するわけにはいかないだろう。

ハロルド 冗談じゃない！私は名誉あるSS隊員だ。私の運命は我が総統と共にある！

ペーター ……困った奴だ。

ハロルド 大体、君がそれを言うのか？君は古参党員で政権を握る以前のSS隊員

じゃないか？私だって君に誘われたからSSに入隊したんだ。

ペーター 聞いてくれよ、俺にとつてSSは出世の手段だった。それはもちろん、若い頃

はナチスの世界観にかぶれてたし、これこそが唯一無二の道だと信じていた

よ。だけど大人になっていつまでも夢みたいなことは言ってもらえない。家族や

生活があるんだ。

ハロルド ……

ペーター お前だってSSに入って得したことは山ほどあつたらう？なかったとは言わ

せないぞ。

ハロルド ……

ペーター それでいいんだ。だが引き時は誤るな。本当に総統と心中する羽目になるぞ。

それもお前だけじゃない。女房子供も一緒にだ。お前、それでいいのか？

問

ペーター 一つ考えがあるんだ。お前が乗ってくればうまくいくはずだ。

ハロルド ……

ペーター もし国が頼れなくなった時、俺達が頼りにできる物はなんだ？

ハロルド ……

ペーター 金だよ。

ハロルド 金？もし負けたらライヒスマルクなんて紙くずになるぞ。

分かってる。だから、換金価値のある財産だ。金(きん)とか、宝石とか…

分かるだろう？

ハロルド ……

ペーター 経済管理本部には、収容所からユダヤ人が身に付けていた財産が集まってくる。

ハロルド ペーター…

沈黙。ペーター狡猾そうな視線でハロルドを覗う。ハロルド、驚愕の面持ちでペーターを見る。

ペーター 俺とお前が協力すれば、ある程度の物は動かせるはずだ。

ハロルド 国有財産に手を付ける気か？

ペーター ハロルド…戦後の世界を生き延びるために、俺もお前も努力をしなければいけない。そうは思わないか？

ハロルド ばれたらどうなると思う？地位も名誉も仕事も全て失うことになるぞ。

ペーター そこは慎重にやろう。大丈夫だ、俺は大佐だぞ。ある程度は自分の裁量で物を動かせる。例えば、俺の命令書でお前がブツを持ち出して俺のところを持ってくる。後は俺とお前のサインがあればすり替えてもごまかせる。

ハロルド 監査が入ったら一発でばれる。

ペーター ……次に赤軍が攻勢に出たらドイツはおしまいだ。監査なんてしてる余裕があると思うか？大体、俺達の地位も名誉も仕事も、戦争に負けたら何もかもが消えるんだぞ。そうなる前に一山当てようじゃないか。

ハロルド そんな悪事が許されるわけないだろう？ユダヤ人の没収財産は我が民族の繁栄の為に使われるべきだ。

ペーター だから冷静になれ。お前、知ってるか？国家元帥ゲーリング閣下がどれほど私腹を肥やしているかを。

ハロルド ……

ペーター あの男、ユダヤ人の没収財産からめぼしい美術品を着服してるんだ。経済管理本部としては許せない行為だ。没収財産は国有の財産だからな。だがゲーリングは国家元帥だ…見逃さざるを得ない。

ハロルド ……

ペーター ゲーリングだけじゃない。幹部連中は大なり小なり汚職をしているじゃないか。この状況でクソ真面目を通したって誰も得をしないぞ。

問

ペーター ハロルド！

ハロルド ゲーリング元帥がどうだろうが関係ない。そんな悪事に加担することなどで

きるわけがない。

ペーター ハロルド・・・

ハロルド 君はさつきから我がドイツが負けることを前提に話をしている。不愉快だ。出て行ってくれ。

ペーター 本気で言ってるのか？

ハロルド 今までの友情に免じて、今の話は聞かなかったことにしてやる。だがこれ以上続けるなら私は君を告発する。ゲシュタポは君を喜んで逮捕するだろう。人民法廷は更に大喜びで君を死刑にするだろう。この前、我が総統の暗殺を企んだ国防軍の将軍たちのようにな。

ペーター・・・見損なつたよ、ハロルド。お前はもう少し賢い男だと思っていた。

ハロルド それはこっちのセリフだ！SS大佐ともあろう者が情けない。

ペーター 分かった。邪魔したな。俺達には時間が残されていない。頑固な愚か者を説得する時間はないんだ。

ハロルド もう一度言う、出ていけ！

ペーター、退場しようとして、一度振り返る。

ペーター お前、ロシア人がどれだけ俺達を恨んでるか知っているか？

ハロルド なんだと？

ペーター まあ、東部戦線をその目で見てない奴には分からんだろうな。いいか、SSには恐らく降伏さえ許されない。覚えておけよ。

ハロルド ドイツは負けない。我が総統が勝利に導いてくださる。

沈黙。パウワー、登場。

パウワー 大佐、そろそろお時間が・・・

ペーター 分かった。(足早に立ち去る)

ペーター、退場。パウワー、敬礼。

パウワー ハイルヒトラー。

ハロルド ハイルヒトラー。

パウワー、退場。転換。

(2)

昼間。レナーテとヘルガが隣の部屋で言い争いをしている様子。声だけが聞こえてくる。

ヘルガの声　ねえ、レナーテ、分かって。私はあなた方のことを思ってるのよ！

レナーテの声　分からないわ。どうしてベルリンから逃げるのが私達の為になるのよ？

ヘルガの声　分かるでしょ、簡単なことよ？

レナーテの声　私には分からない。

レナーテ、登場。それを追ってヘルガも出てくる。

ヘルガ　・・・ベルリンは多分戦場になる。そうなるからじゃ遅いのよ？赤軍が来る前に、西の方へ逃げてちょうだい！

レナーテ　あなたはベルリンまで赤軍が来るって言うの？そんなわけないじゃない！

ヘルガ　・・・どうしてそう思えるのよ？

レナーテ　ドイツは負けないわ。総統が何とかしてくださるのよ。

ヘルガ　レナーテ・・・確かに、今は不利な戦いをしているって思えるかもしれない。でも、我が総統

はいっだって何とかしてくれる。

ヘルガ　・・・

レナーテ　思い出してみても、今はあの頃と同じなのよ。

ヘルガ　あの頃？

レナーテ　そう、世界恐慌のあおりを受けて、インフレが進み、街中に失業者があふれたあの頃よ。思い出してみても、誰にもどうにもできないと思っていたあの状況を何とかしてくれたのは誰？

ヘルガ　・・・それは総統よ。

レナーテ　そうでしょう！総統ならきつと今の状況だって、私達の思ってもみないやり方で覆してくれるはずよ。

ヘルガ　それは危険な考え方よ。どんな人間にだってできないことはあるわ。

レナーテ　あなたの言ってることの方がはるかに危険よ。それは祖国に対する裏切りだわ。

ヘルガ　そうは思わない。私はドイツ人だけど、ナチスを盲信してはいない。むしろ、ずっと恐ろしいことにならないか恐れてきた。それが現実になったのは本当に残念なのだけ・・・

レナーテ　ヘルガ、あなたがそう思ってるなら、もう話すことはないわ。私は今でも総統の世界を、偉大なるドイツを信じてるわ。

ヘルガ　レナーテ、落ち着いて考えて。戦争は多分、最悪の形で終わるわ。

リーザが憤って入ってくる。

リーザ　ヘルガおばさん、何でそんなことを言うんですか？私達のドイツが負けるはずありません！

ヘルガ　リーザ・・・困ったわね。

レナーテ　盗み聞きしてたの？

リーザ　違う、聞こえてきたのよ。

レナーテ　子供の口出す話じゃないわ。

リーザ　私もう十七よ。子供じゃない。

レナーテ　リーザ。

リーザ　（レナーテを無視してヘルガに食って掛かる）おばさん、総統はかつてこう仰ったわ。ドイツ民族の繁栄は、ドイツ民族の努力によってしか勝ち取ることができない。これは他人事じゃないの、ドイツ民族の問題なの！この戦争の遂行の為にともっと私達は努力しなきゃいけないのよ！

ヘルガ　ねえ、リーザ。あなたはまだ若いわ。

リーザ　年齢は関係ありません。祖国ドイツの為に努力するだけです。

ヘルガ　私達が努力すれば戦争に勝てるの？そうは思えないのだけど・・・

リーザ　そんなことはありません。銃後と前線が心を一つに合わせればどんな敵でも打ち破れます！

レナーテ　（興奮するリーザをたしなめる）やめなさい。

リーザ　（やめない）私達ドイツ民族は総力戦を望んだの。より全面的でより徹底的な戦争を望んでいるのよ！勝利の日まで、ドイツ民族は戦い続けるわ！

リーザが騒いでる間にコンラートが顔をのぞかせている。

ヘルガ　ゲツベルスの受け売りじゃない・・・

リーザ　全ドイツ人は心を合わせ、その義務を全うする！必要ならいかなる犠牲を払うことも覚悟しなければならないのよ！

間

コンラート　何を騒いでるんだ。

レナーテ　お父さん・・・

コンラート　ヘルガ。

ヘルガ　はい。

コンラート 話の流れはよく分からんが、私は君の意見に賛成だ。
ヘルガ ……

コンラート だが、この子には何を言っても無駄だよ。レナーテだって大差ない。
レナーテ 私もこの子も間違ったことは言っていないわ。

コンラート 帰りなさい。君の時間をもったいないぞ。

ヘルガ ……はい。

コンラート すまん。それに、ありがとう…

ヘルガ いえ…残念です。失礼します。

ハロルドの声 ただいまー。

ヘルガ、退場しようとしてハロルドとブルーノと鉢合わせる。

ハロルド ヘルガ！久しぶりじゃないか。

ヘルガ ええ。ごめんなさい、ハロルド。失礼するわ。

ヘルガ、退場。ハロルド、呆気にとられて見送る。

ブルーノ 奥さん、お邪魔します。

レナーテ あら、ブルーノさん。ご無沙汰ね。

リーザ、退場しようとする。

ハロルド リーザ、どうした？

リーザ 少女同盟の看護訓練の時間なの。

ハロルド そうか…

リーザ 失礼します、ブルーノさん。

ブルーノ ああ、気を付けて行っておいで。

リーザ 行ってきます。

ハロルド・レナーテ 行ってらっしゃい。

リーザ、退場。

ハロルド 何かあったのか？

レナーテ いいえ、何もないわよ。

コンラート 親切な友人が忠告に来てくれたんだ。聞く耳持たなかったがね。

レナーテ お父さん！

コンラート　ヘルガは本当にお前を心配してくれたんだぞ。いつか後悔する日が来ないといいな。

コンラート、退場。 Harold、ブルーノ、顔を見合わせる。レナーテ、取り繕うように口を開く。

レナーテ　ごめんなさいね。ブルーノさん、ごゆっくり。ちよつと！お父さん！
Harold　あ、レナーテ、ちよつと・・・

レナーテ、Haroldの言葉を聞かず退場。

Harold　すまないなあ、ブルーノ。なんだかバタバタしてて。

ブルーノ　奥さんになんかニュースがあったんじゃないんですか？

Harold　いいよ、後で話せばすむことだ。

ブルーノ　良いニュースですか？

Harold　ああ。聞いてくれるかい？

ブルーノ　ええ。何があったんですか？

Harold　近々中佐に進級できそうなんだ。

ブルーノ　・・・そうですか。

Harold　入隊してもうすぐ六年になる。周りと比べても早い方なんだよ。

ブルーノ　(機械的に) おめでとうございます。

Harold　こんなに出世するとは、教師をしていた頃は思いもしなかったな。

ブルーノ　それだけ重要な仕事を任されているんですね。

Harold　まあ、経済管理本部の仕事は戦争には必要不可欠だ。物資を管理しているわけだからな。

ブルーノ　(話題を変える) Haroldさん。

Harold　なんだ？

ブルーノ　骨を折ってもらって、ありがとうございます。おかげでボンの工場に移れることになりました。

Harold　ボン？随分小さい街に行くんだなあ。

ブルーノ　Haroldさんの推薦状のおかげです。凄いですねSS少佐のお墨付きは。役に立てて良かったよ・・・まあ、君がベルリンを離れるのは寂しいのだけだね。

ブルーノ　そう言うてくださって嬉しいですよ。また会いに来ます。

Harold　ああ、ぜひそうしてくれよ。教師時代の友人で今でも付き合いがあるのは君だけなんだから。

ブルーノ
はい。

ブルーノ
ハロルド
別になあ、ブルーノ。君に言われるままに推薦状を書いたが、なぜボンへ？
別にボンじゃなくても良かったんです。ベルリンじゃなければ。

ハロルド
どういう意味だ？

ブルーノ
………

ハロルド
ブルーノ？

ブルーノ
SS 隊員としてではなく、友人として聞いてくれますか？

ハロルド
勿論だ。

ブルーノ
戦争のこれからを考えると、ベルリンから離れておいた方が良くと思ったんです。

ハロルド
……分らないな。ドイツの街はどこも激しい空襲に曝されている。ハンブルクも、フランクフルトも、ミュンヘンも、勿論ボンだって大差ないだろう。何もベルリンだけが危険なわけじゃない。

ブルーノ
確かに、空襲の危険はどこでも同じでしょうね。……でも地上戦になったらどうでしょう？首都であり、総統のいるベルリンは一番の戦略目標になるんじゃないませんか？

ハロルド
……君も我が帝国が敗北すると言うのか？

ブルーノ
君も？

ハロルド
何でもない。こつちの話だ。いいか、ブルーノ。ドイツは決して負けない。ベルリンが戦火に焼かれるなんて有り得ないことだ。

ブルーノ
先輩……

ハロルド
くだらないデマや噂に惑わされるのは愚かなことだ。我々は我が総統と我が党を信じればいいんだ。

問

ブルーノ
ハロルドさん。あなたはナチスが政権を握ってからも、障碍者の僕と変わらず友人でいてくれた。

ハロルド
当たり前じゃないか。

ブルーノ
残念ですけどそれは当たり前のことじゃなかった。ナチスの価値観は人間を差別します。障碍者の僕はその価値観で見ると劣等な人間なんです。だから恋人も友人も僕から離れていきました。でもあなたは違った。本当に心から感謝してるんです。

ハロルド
………

ブルーノ
だから言わせてください。ハロルドさん、あなたに対する友情と感謝からの言葉です。

ハロルド どうしたんだよ？そんな改まって。

ブルーノ

あなたは可能ならSから離れるべきです。それができないならせめて、敗戦後のことを頭に入れて行動するべきです。中佐になって喜んでいる場合じゃありませんよ。

ハロルド ……なんだと？

ブルーノ

僕はあなたを知っています。あなたは生真面目で、学問と子供が好きで、平穩をこよなく愛する優しい人間でした。でもあなたは変わってしまった。

ハロルド

急に何を言い出すんだ？今でも僕は変わってないさ。

ブルーノ

……そうなのかもしれません。だからこそ、恐ろしくもあります。あなたは何も変わってないはずなのに、いつの間にかSの歯車となって、ナチスの作り出した恐ろしい国家の一部になってしまった。

ハロルド

……

ブルーノ

あなたには僕という友人がいる。きっとユダヤ人の友人もいたことでしょう。それでもあなたは総統は正しいと言い張る。僕にはそれが不思議でならないんです。

ハロルド

ブルーノ……

ブルーノ

ねえ、ハロルドさん。教えてください。ほんの何年か前までこの街にいたユダヤ人は皆どこに行ってしまったのです？どこかで無事に家族と共に今日を生き、明日という日を迎えられるのでしょうか？

問

ブルーノ

機密ですから、答えられないですよね。

ハロルド

そんなことを聞いてどうするんだ。ユダヤ人は我々の敵だ。

ブルーノ

……僕の知っているあなたはそんなことを言う人じゃなかった。まあ、あなただけではありません。平凡で穏やかな普通の人達が、いつの間にかそんな恐ろしいことを平気で言うようになってしまった。僕はずっとそれを覚めた目で見てきました。

ハロルド

……

ブルーノ

でもそろそろ現実を見る時なのではないでしょうか？別に今までのことをどうこう言う気はないんです。ただ僕は友人として忠告させてもらいます。ドイツは確実に戦争に負けます。

ハロルド

……そんなことはない。

ブルーノ

東からはソ連。西からはアメリカやイギリス。僕達はまさに世界中を敵ににしてしまったんです。それでもドイツは勝てるんですか？僕にはそうは思えない。

ハロルド

勝てなければ、ドイツ民族は滅亡する。……それだけのことだ。

ブルーノ ナチスが滅びても、ドイツ人は滅びません。あなただって歴史教師だから分かるでしょう？ 国家がなくなっても民族丸ごと滅亡するなんてことはありませんよ。

ハロルド 君がそう考えるのは君の勝手だ。だが僕は違う！

ブルーノ ヒトラーと心中するつもりですか？

ハロルド 心中などしない、我が総統とドイツは不滅だ。必ずこの戦況はひっくり返る。

ブルーノ 本当にそう思っているのですか？

ハロルド 当たり前だ！既に僕の人生は深く我が総統の、そしてSSの世界観と結びついているんだよ。今になってそれを覆すことなんてできやしない。

沈黙。ブルーノ、諦めたように大きなため息を吐く。

ブルーノ 分かりました。僕の言うことを聞く気はないんですね。

ハロルド 僕は誇りあるSS隊員だ。我が帝国の勝利を疑いはしない。いいか？我が総統は7月20日の事件でも、すぐ傍で爆弾が爆発したにも関わらずかすり傷しか負わなかった。これは我が総統が選ばれた指導者である証拠だ。

ブルーノ ……帰ります。もう当分お会いすることもないでしょう。

ハロルド 好きにしまえ。

ブルーノ 先輩、生き延びてくださいね。

ハロルド ……
ブルーノ あなたが死んだら僕は悲しい。覚えていてくれたら嬉しいです。

ブルーノ、退場しようとする。ハロルド、自然と手を貸す。ブルーノ、足を止め悲しそうにハロルドを見つめる。

ハロルド ?

ブルーノ ……どうして、僕達はこうなってしまったんでしょうか？

ハロルド ……

ブルーノ いいんです、なんでもありません。

ブルーノ、退場。ハロルド、ソファアに座り込む。やがてレナーテが飲み物を持って登場。

レナーテ あれ？ブルーノさんは？

ハロルド 帰ったよ。

レナーテ こんなに早く？

ハロルド ああ、急ぎの用があるらしい。

レナーテ 何しに来たの？
ハロルド ボンに引越すから、その挨拶だ。
レナーテ 寂しくなるわね。
ハロルド ……そうだな。

間

レナーテ 飲む？タンポポコーヒー。
ハロルド いらぬ。
レナーテ そう。(片付けようとする)
ハロルド あ、待ってくれ。やっぱりもうよ。
レナーテ 変な人ね。はい、どうぞ。(カップを渡す)
ハロルド (受け取って一口飲み顔をしかめる) ……やっぱり美味しくはないな。
レナーテ (自分も飲み) 慣れたらいけるわよ。
ハロルド なあ、レナーテ。
レナーテ なに？
ハロルド 中佐への進級が決まった。
レナーテ え！……本当？
ハロルド 本当だ。
レナーテ 凄じくない！
ハロルド ああ、ありがとう。
レナーテ まだ少佐になってそんなに経ってないのに。
ハロルド SSは能力主義だからな。
レナーテ それだけあなたがドイツに尽くしたってことね。私も鼻が高いわ！きつとり
ーザも喜ぶわよ。あの子、あなたがSS隊員だっていうことが一番自慢なんで
すってよ。
ハロルド 君らが喜んでくれるなら、進級の喜びもひとしおだよ。
レナーテ ……ねえ、あなた。
ハロルド うん？
レナーテ ヘルガがドイツは負けるって言ったの。
ハロルド ……そうか。

間

レナーテ とんでもない話よね。銃後でそんなことを言うなんて、前線で戦ってる同胞に
対する侮辱よ。

ハロルド その通りだ。もはやこのドイツには銃後も前線もない。全てのドイツ国民が徹底的な総力戦を戦うほかに、この民族の危機を脱する方法はないんだ。

レナーテ 分かってるわ。私達は努力を惜しむことは決してない。今までがそうであったように、これからも全ての力を国家の為に注ぐわ。

ハロルド 「我が闘争」で総統はこう言っている。「自らの民族の為に流された血は必ず正当化される」。我々の犠牲は必ず我が民族の未来へ繋がっているんだ。

レナーテ 最後に勝つのは私達ね？

ハロルド そうだ。ドイツは不滅だ。

レナーテ ええ、あなたの言う通りだわ。

転換。やがてかき消すような大砲の音が何度も鳴り響く。

6 1945年4月21日 プロローグの続き

ハロルド、レナーテ、コンラートが今後のことを話し合っているところに作業着を着たりリーザがつかつかと入ってくる。

レナーテ リーザ？どうしたの？

リーザ (高らかにナチス式の敬礼) ハイルヒトラー！

三人、凍り付く。コンラート、恐る恐るリーザに質問する。

コンラート リーザ、何を考えてるんだ？

リーザ 決まってるでしょ？ドイツ民族の義務を全うするのよ。

コンラート・・・まさか、戦うつもりなのか？

リーザ 国民突撃兵として戦うわ。

レナーテ 何を言ってるの！そんなこと許しません！

リーザ 母さんこそ何を言ってるの？武器を持つる者は一人もベルリンを離れてはならないのよ。私は武器を持つるわ。だったら戦わなきゃ！

コンラート 馬鹿なことを言うな。そんなことをしても何にもならん。いいか？お前は自分が生き延びることだけ考えろ。

リーザ 我が総統はそれを望んでいない。ベルリン市民の最後の一人まで、薄汚い赤軍と徹底的に戦い続けることを望んでいるわ。

レナーテ リーザ・・・冗談はやめて。

リーザ ねえ、分かってる？父さんも母さんも、それにおじいちゃんだって武器を持って戦う義務がある。それが帝国市民の義務なのよ？

三人、顔を見合わせ、言葉に詰まる。

リーザ　父さんは誇りあるSS隊員、それも中佐でしょう？何を迷うことがあるの？
母さん、母さんはいつだって総統は正しい、ドイツは勝つて言っていたよ
ね？

レナーテ　・・・・・・・・

リーザ　あれは嘘だったの？ベルリンまで赤軍が攻めてきたからって、簡単に考えを
変えてしまうの？だったら母さんの信じていた国家社会主義って何だった
の？

間

リーザ　（ふと口調を和らげて）きついこと言ってごめんね、母さん。母さんは母さん
の思うようにしたらいいと思ってるの。

レナーテ　リーザ？

リーザ　逃げたい人は逃げればいい。どうせもうドイツは滅びるんだから、最後は皆の
好きにしたらいいのよ。きつと我が総統も見逃してくれるわ。私達、ドイツ人
はずつとよく戦ってきたもの。うちは模範的な帝国市民の家庭だった。私はそ
れを誇りに思ってる。

ハロルド　リーザ。

リーザ　・・・父さん。それでも私は戦うわ。

ハロルド　なぜだ？

リーザ　なぜ？

ハロルド　ああ、なぜお前みたいな子供が戦わなきゃいけないんだ？

リーザ　だって、我が総統のいない世界に生きる価値なんてないもの。

三人、絶句。

リーザ　そろそろ行かなきゃ。ロットテ達と約束してるの。

ハロルド　待ちなさい、リーザ。

リーザ　ごめんね、行ってきます。

ハロルド　リーザ！

リーザ　（敬礼）ハイルヒトラー！

リーザ、走り去る。

ハロルド 待ちなさい！（追いかける）

レナーテ リーザ！行かないで！

ハロルド、リーザを追って退場。レナーテ、崩れ落ちる。コンラート、力なく座り込む。

コンラート 神よ・・・なぜこんなことに・・・

間

コンラート 大人の責任だ、私達にはあの子の心をちゃんと育てる義務があったというのに・・・

レナーテ ……やめて、お父さん。

コンラート 私達のせいだ。

レナーテ やめて！！！！

至近弾の落ちた大きな爆発音。二人、その場に伏せる。息を荒げてハロルドが戻ってくる。
沈黙。

レナーテ リーザは？

ハロルド （首を振る）・・・駄目だ、見失ってしまった。あんなに足の遅い子だったのに・・・。ユーゲントで鍛えられたんだな。

間

レナーテ あなたがSSなんかに入隊するから・・・

ハロルド なんだと？

レナーテ あなたのせいよ！

ハロルド ナチにかぶれたのは君の方が先だっただろう！

レナーテ 私はただの主婦よ。でもあなたはSSじゃない！

ハロルド 君だって入隊に賛成したじゃないか！

レナーテ 返してよ！リーザを今すぐに返して！

コンラート いい加減にしないか！！！！

間

コンラート そんな言い争いをしている場合か！（出て行こうとする）

レナーテ ちよっとお父さん、どうするつもり？

コンラート リーザを探しに行く。

レナーテ やめて、危ないわ。

ハロルド お義父さん、危険です。

コンラート リーザはそんな中を出て行ったんだぞ！まだ子供のあの子がだ。こんな年寄

りが怖がっていられるか！

レナーテ お父さん！待って！

コンラート、退場。沈黙。

レナーテ ……どうすればいいの？

ハロルド ……

レナーテ ねえ！どうしたらいいのよ！！！！

もう一度、至近弾の大きな爆発音。近所の建物の崩壊する音も聞こえる。二人、伏せる。

レナーテ あなた…

更に砲弾が飛んできて爆発する大きな音が続く。

レナーテ （力なく）おしまいだわ…みんな死ぬのね…

ハロルド、突然足早に退場する。

レナーテ ハロルド？

ハロルド、すぐに戻ってきて、テーブルの上に拳銃と薬品サンプルを置く。

レナーテ あなた…

間

ハロルド どっちを選んでもいい。

レナーテ 何を考えているの？

ハロルド ……見て分からないか？

レナーテ ……

ハロルド 僕は総統の、ナチスの世界観を信じた。その世界観の中で生き、仕事をし、家族を養った。その世界が減じるなら、それを信じた僕だって滅びなければならぬ。そうじゃないか？

沈黙。レナーテ、テーブルに近付く。

レナーテ これは何のお菓？

ハロルド 青酸だ。飲めばすぐに逝ける……

レナーテ 私、銃は使えないと思う……

ハロルド ……なら、菓は君が使ってくれ。

レナーテ、アンプルを手に取り、椅子に座る。ハロルドはそれを見て拳銃を手に取り、椅子に座る。二人、そのまま動かず、長い沈黙。やがてレナーテがぼつりと口を開く。

レナーテ リーザ……

ハロルド もうすぐ確実に赤軍がベルリンに雪崩れ込んでくる。そうなったらおしまいだ。連中はドイツ人を皆殺しにするだろう。

レナーテ 皆殺し？

ハロルド ああ、皆殺しだ。

レナーテ ……

ハロルド ……

先にやったのはこっちだ。ロシア人は我々の振る舞いを忘れてはいないだろう。

レナーテ ……

ハロルド 総統はソ連との戦争を絶滅戦争と呼んだ。国防軍も武装SSもその命令の下で、組織的に市民を殺したんだ。総統が欲したのは土地であり、劣等民族であるスラブ人は欲しなかったんだ。

レナーテ そんなこと私達は知らなかった。

ハロルド 本当にそうだろうか？私達は知っていて知らないふりをしていただけなんじゃないか？総統の言うドイツ民族の繁栄とは、幾百万の他国民の犠牲を前提としていたことを。

レナーテ どういう意味？

ハロルド 以前、ブルーノに聞かれたよ。かつてこの街にいたユダヤ人はどこに行ったんだ？今も生きてるのか？私はその答えを知っていた。彼等は生きていない。絶滅収容所で処理されたんだ。

レナーテ ……

ハロルド 経済管理本部の仕事の一つは、収容所のユダヤ人から没収した財産の管理と運用だった。想像できるか？その財産には靴もメガネも果ては金歯も含まれていた。・・・メガネや金歯まで没収されたユダヤ人が生きているはずがない。彼等は収容所で裸にされ、物のように殺された。我が総統の第三帝国はそういう国家だったんだ。

レナーテ そんなこと、私達一般市民には知らされていなかったじゃない。

ハロルド じゃあ君は、この街から消えたユダヤ人や社会主義者や障害者はどこに行っただと思っていたんだ？みんなどこかで平和に暮らしているとでも思っていたのか？

レナーテ それは・・・

ハロルド 私達は知っていた。知っていながら知らないふりをしていたんだ。それが正しいことだと信じていたから。

間

レナーテ もうやめましょう。総統の世界と一緒に滅びるなら、その世界を信じたままであらう。

ハロルド ……君の言う通りだ。我が総統の世界観はあまりにも甘美で、魅力的だったんだ。

沈黙。二人とも動かない。砲撃の音が続く。

ハロルド (座ったまま呟く) ハイヒトラー。

レナーテ (同じく) ハイヒトラー。

しかし、二人とも動こうとはしない。耳をつんざくような爆音が続く。段々と大きくなる。暗転。

エピローグ 1949年11月 東西ドイツがそれぞれ独立を果たした時期

同じ室内だが装飾品が減り、質素な印象に変わっている。国民ラジオは姿を消し、同じ場所に小さなレーニンの胸像が置かれている。ソファーセットにはオットーが難しい顔をして座り込んでいる。そこにレナーテがやってくる。

レナーテ ごめんなさい、せっかく来てもらったのに、おもてなしする物が何もないのよ。
オットー ああ、お構いなく。こっちの物不足にも多少は慣れたさ。

レナーテ　ねえ、西はどうなの？物は十分にあるの？

オットー　もう戦争が終わって四年だ。十分に復興を果たしたとはとても言えないが、こ
つちよりはましだよ。

レナーテ　そう・・・

オットー　正直、後悔してるよ。

レナーテ　何を？

オットー　この街に戻ってきたとき。あのままアメリカにいれば良かった。

レナーテ　私はもう一度オットーさんに会えて嬉しいわ。

オットー　ユダヤ人でもかい？

レナーテ　つまらない皮肉を言わないで。今はもうそういう時代じゃないでしょ？

オットー　ああ、すまない。私も君らにまた会えて嬉しいよ。それにいくら瓦礫の山とは
いえここは私の故郷だからね。

レナーテ　そうね。

オットー　ただ・・・一度東に入ったら西に出られなくなるとは思ってたよ。考え
が甘かった。

レナーテ　ドイツも真つ二つ。ベルリンも真つ二つ。こんな時代が来るなんてねえ。

オットー　まったくだ。昔が懐かしいよ。

レナーテ　でもね、慣れてしまえばこつちの暮らしだって悪くないわ。ひとことと比べる
と落ち着いたしね。

オットー　人間というのは、どんなにひどい状態にも慣れてしまうものなのかもしれな
いな。

ハロルドの声　ただいまー。

レナーテ　帰ってきたわ。

ハロルド、登場。質素な服装に変わっている。オットーを発見し目を丸くする。

ハロルド　オットーさん！

オットー　久しぶりだね、ハロルド。(握手を求める)

ハロルド　(応じて)驚きました・・・戻ってきてたんですね。

オットー　ああ、先月の頭だ。こつちに来るなり東の建国宣言だったよ。それでなかなか
挨拶に来られなかった。

ハロルド　そうですね。会えて嬉しいです。

オットー　(少し改まって)ハロルド、レナーテ。

ハロルド　はい。

オットー　リーザとコンラートさんのことだ。何と言ったらいいか。とにかくお悔やみ申
し上げるよ。

ハロルド
・・・ありがとうございます。

レナーテ
ありがとうございます。

オットー
何千万という人間が戦争の犠牲となった。それでもこの世界は新しい戦争の火種を抱えている。愚かなことだ。

レナーテ
ねえ、オットーさん。

オットー
なんだい？

レナーテ
父はすぐに見つかったけど・・・リーザはね、まだ見つかってないの。

オットー
そうか・・・

レナーテ
だから私達まだ諦めてないのよ。ねえ？

ハロルド
ああ、そうだな。

レナーテ
いつか帰ってきてくれるような気がするのよ。

ハロルド
私はそう信じてるよ。

オットー
・・・そうか。心からそうなることを祈るよ。

レナーテ
ありがとうございます。

問

オットー
(話題を変える) ハロルド、君は今は何を？

ハロルド
ああ、今はまた教師をしています。

オットー
そうか、良かったじゃないか。東で公職に就くのは難しかったんじゃないか？

ハロルド
前職のコネでなんとか引っ張ってもらったんです。

オットー
前職？

ハロルド
戦争中はちよつと政府関係の機関に勤めてたんです。

オットー
そうだったのか。てっきりずっと教師を続けているものだと思っていたよ。

ハロルド
そうできれば良かったんですが、なかなかそうもいかなかったんです。

オットー
大変だったんだな。

ハロルド
それでも今は生きてこうしています。それだけでも感謝しないと。

レナーテ
そうね。危なかったこともたくさんあったもの。

オットー
私もだよ。あの時ヨーロッパを離れなければどうなっていたことか。想像したくもない。

問

オットー

聞きにくいことを聞くようだが、ベルリンでの戦いはそりゃひどい物だったんだろう？ソ連軍の暴力はひどかったそうじゃないか。君らはその時どうしてたんだ？

ハロルド 私達はギリギリのところでもベルリンを離れることができたんです。本当に危ないところでした。

レナーテ でも父とリーザはその時にはぐれてしまつて・・・すまない。馬鹿なことを聞いてしまった。

レナーテ いいのよ・・・

ハロルド その後しばらくはミュンヘンにいたんです。だけど・・・

オットー そうか、二人を探すためにベルリンに戻つたというわけか。

ハロルド そうです・・・

レナーテ リーザが帰ってくるまでは、ここを離れるわけにはいかないわ。

ハロルド だから私達は、この東ベルリンで、東ドイツの国民として生きていくしかないんです。

オットー・・・私は何とか逃げることを考えているよ。

レナーテ オットーさん・・・

ハロルド 危険ですよ。

オットー 分かつているさ。だがそれでもソ連人がのさばる故郷を見続けたくはない。それなら西ドイツに、せめて西ベルリンに逃げ込みたい。

ハロルド どうやって？国境線は完全に封鎖されてますよ。

オットー 方法は探せば何とかなる。現に今までだって大勢の市民が西に逃げ込んでいる。

ハロルド・・・捕まつて投獄されたり、射殺されたり、そういう人間も沢山いますよ。

オットー 危険は覚悟しているよ。

ハロルド そこまで社会主義というのはいやいものですか？

オットー 違うよ。政治体制は関係ない。だがそれを選ぶのは国民であるべきだろう？こんな風にスターリンに押し付けられた社会体制なんて受け入れられるものか。結局、今の東ドイツを支配しているのは、ソ連軍総司令官のチュイコフとソ連管理委員会だ。

ハロルド 戦争に敗北した以上、ある程度は仕方ないことです。それよりむしろ、どうやり過ぎずかを考えた方が安全です。

オットー 分からないな。食糧は未だに配給制、工場の機械は分解されてソ連に奪われている。西ではそろそろ配給券はいらなくなるし、復興はどんどん進んでいるんだぞ。

オットーさん、私ね、今社会主義を勉強してるんです。

オットー・・・ハロルド。

ハロルド この国で生きていくには必要なことです。それにね、なかなか悪いものでもないですよ。なあ？

レナーテ そうねえ、まだまだ始まつたばかりですもの。理想と現実と距離があるのは仕

方ないことね。

オットー 驚いたな。私にはそうは思えそうもないよ。

ハロルド ここで生きていかなきゃいけない以上、抗うよりも先に、受け入れていった方がいい。

問

オットー (ふと呟く) だから我々はヒトラーとナチスの台頭を許してしまったのかもし

れないな……

レナーテ (急に激昂する) その名前を口にしないで!

オットー ……どうした?

レナーテ 私達はいつらに騙されたのよ! そのせいでリーザが……私達のリーザが……

オットー すまない……

ハロルド オットーさん、どんな思想も体制も受け入れるとしても……ヒトラーとナチ

スだけは許すわけにはいかないんです。あの連中は私達から娘を奪った。あいつらが悪魔のやり方で我々を誘惑したんです。あいつらさえ、あいつらさえいなければ……

問

オットー ヒトラーを憎む気持ちでは君らに負けるつもりはないよ。私だって多くの友

人や親戚を亡くした。……ただユダヤ人という理由だけでね。

レナーテ オットーさん、信じてください。私達は知らなかったんです。私達も騙されて

いたんです。

ハロルド もしあんな恐ろしいことをあらかじめ知っていたら、私達は決してナチスを

支持しなかった。それが大半の善良なドイツ人の心境です。ナチスは既に滅び去りました。だが我々はあの悪魔を忘れない。決して許さない。それだけは譲れない。

沈黙。段々と舞台が暗くなる。その中でオットーが沈鬱な表情で問いかける。

オットー 本当にそうなのだろうか? 悪魔は滅び去ったのか? ユダヤ人を憎み暴力を振

るった人間は? それを冷笑しながら傍観していた人間は? もうみんないなくなったのか? もしも悪魔が潜んでいるとしたら、それは今でも全てを黙って

見ていた人間の心の中でほくそ笑んでるんじゃないだろうか?

終